みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

土方久功日記Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001015

第Ⅰ部

土方久功日記 Ⅱ

土方久功日記　第8冊
1925年7月6日～11月29日（大正14年）

解　説

第8冊の始まり7月6日には，すでに台湾から戻って2週間たち，久功は落ち着きを取り戻して，元の生活にかえっていた。

展覧会は，国外展，国内展ともによく見ていた。築地小劇場へは足繁く通い，丹念に見た。さらに，新劇のみならず，中国演劇や伝統演劇も鑑賞した。7月19日，緑牡丹一行の支那劇を帝劇で見た。しかも，25日にも，再度見に行った。11月5日には，新橋演舞場で，新橋温習会の公演を見ている。他に，舞踏公演にも関心があり，熱心に見ていた。
8月24日，鎌倉の海浜ホテルでダンス公演を鑑賞した。日記にプログラムを全部記し，批評を加えている。9月12日には，新聞で紹介されたデニッショウン一座の舞踊公演を，帝劇に見に行っている。長い批評を日記に記し，さらに，22日にも，デニッショウンの踊りを見に，再度帝劇に出かけた。台湾滞在中は，展覧会にも，観劇にも縁のない生活を送っていたが，その埋め合わせをするかのように，熱心に展覧会，観劇等に通った。

7月28日には鎌倉に行き，数日のんびりと過ごした。8月20日には，再び鎌倉を訪れ，1週間ほど過ごした。平和な日々であった。

久功は，三沢寛宛の手紙で，二科展，院展などの公募展に出品しないと述べている（7月21日。しかし，翌年の院展には，彫刻4点を出品した。そして，落選した）。この年，公募展への出品は止めたものの，それらに対する関心がなくなったわけではない。9月3日，二科展，院展を丹念に見て，長い批評を克明に日記に書いている。また，10月23日，11月5日と2度にわたって帝展を見に行っている。時間をかけ，じっくり見たはずであるが，なぜか，日記にはこのときの帝展の批評が全く書かれていない。

[8　千九百二十五年〔表紙〕　七月六日ヨリ　同年十一月二十九日迄
　　大正十四年　　功]

〔七月〕

六日

午後，江波兄弟が来る。久しぶりで晩までゆっくりして帰る。

七日

パラ〳〵雨。夕方，小石川へゆく。叔母様[1]が丁度外出される処だったので，すぐお暇して築地にゆく。敬ちゃん〔土方与志〕と入れ違ひになって逢へなかったので，芝居を見てくる。シュトランムの「牧場の花嫁」[2]，ストリンドベルクの「母の愛」[3]と，マゾーの「休みの日」で，演出は全部小山内氏。

ハーゼンクレーフェルの「人間」，「決定」，「黒死病」を読む。「人間」。小山内氏は，解説の中に，北村喜八氏は，「表現主義の戯曲」の中に「人間」を「行為の戯曲」として賞讃して居る。だが自分の趣味から云ふならば，自分は此の戯曲を取らない。成る程，行為は大きい。原始語は力強い。成る程，冗漫は許されない。要約の必要は大きい。爆発は力強い。けれども静寂の中の爆発は又力強い。騒擾と騒擾とをつなぐ力強い沈黙がある。そこにリズミカルなリズムが生れる。扨て芸術は内容の説明――論議ではない。内容の粉飾である。（とは云へ，技巧は粉飾の為の粉飾では決してなく，内容のより探く〔深カ〕，より確かな表現でなければならないのだが）これは矛盾だらうか。否，これは正直な皮肉なのである。尚云ふならば，その要約によって賞讃された此の作が，何と惜しげもなく場面を冗に費して居るか。其故に，此の要約は形式と趣味とに多く係はると思はれる。けれども亦，これは，目指されたる目的への道程として，確かな足どりであった。何故なら作者は次に忽ち，「黒死病」を完成したからである。自分は，「黒死病」の完成の為に，作者と「人間」とを，喜んで高価に見積るものである。

八日

夕方，築地にゆき，久敬〔土方与志〕と銀座で食事をとって，九時前に家に帰る。夕方驟雨。

九日

午前，遠山五郎[4]氏を尋ねたが，熱が出て寝て居られたので，小城サンに行って，十時半頃帰る。

十日

昨夜遅く降り出した雨が，終日止まずに寒い。

十一日

曇り。小雨。午後，江波の所に出かけたが，〔生〕相憎四十九日の法会だったので，玄関で辞して美術学校まで歩き，三沢に会って夕方帰って来る。

十二日　日曜日

午前十時半に甘露寺の新居を麻布宮村町に尋ね，久々で一緒に食事をとって，四時に帰って来る。終日雨が降って雨が降って，道がぬかるんで，此の上もなく不愉快である。

十三日

雨は怪しげに止んだ。今日は，自分の誕生日だ。終日家に居て，静かである。夕方，久顕[5]サンが鎌倉から帰って来たので，夜二人で上原サンに行って，十時まで遊んでくる。

十四日

寒い。朝のうちに石膏屋が来てくれた。夕方，江波の所へ行く。原瀬が来て居たので，一緒に直きに辞して，早く帰って来る。原瀬は十時過ぎまで話して行った。

十五日

天気はどうやら晴れたが，恐ろしく寒い。新聞は五十年ぶりの寒さと題して，昨日の温度表最高七十度[6]，最低六十度[7]を示して居る。

午後，市川に青田[8]サンを尋ね，晩九時に帰って来る。

十六日

午後，築地の舞台稽古を見にゆく。ストリンドベルクの「ユリイ」[9]と「サムーン」[10]だ。帰り，伊藤の圀サン[11]と銀座へまはって，十二時前に帰って来る。

十七日

夕食後，上原[12]サンに行き，勝チャン[13]をつれて江波を訪れ。江波，原瀬と皆で宮田を尋ね，遅くなって帰って来る。

十八日

終日家に。

十九日　日曜日

夜，緑牡丹一行の支那劇を見に帝劇にゆく。時間が早過ぎたので女優劇を二つ程見たが，実に例によってくだらない。支那劇は白科は勿論，筋さへも分らないながらに，ずっとしっかりした感じを持たせる。題は，「四郎探母」で，緑牡丹一座の評判の激しい立まはりはなくて，これは全く動きのない，併し其故に筋は更にわかりようがなかったとは云へ，楊延輝四郎（賽三勝），公主（緑牡丹）の叙情的な二重唱で一貫されたよい唱戯であり，聴戯である。

二十日

夜，築地にゆく。サムーンだけ見たら，久敬からたのまれたので，和田精，浅利鶴雄[14]と愛宕山の放送局にゆく。一時間も安蓄音器ぢみたみっともない，長田幹彦[15]氏作，東京景物詩「夏の夜」を聞かされてうんざりする。

二十一日

夜，築地にゆき，今日は「ユリイ」だけ見る。幾分調子がよすぎて，幾分調子が低い。はねてから銀座で飲んで，電車を失って，囹チャンと劇場に行って宿ってしまふ。

✓芽ばえたるサルビヤの子は一列にかたまり芽ばえて大きくならず
✓遅く蒔きしサルビヤの子は一列にかたまり芽ばえかたみに育たず
✓サルビヤの芽ばえ繁けれ時遅く蒔きしものからまだにちいさき
✓群れ繁く芽ばえてちさきサルビヤはかたみに育たずうろぬきてやる

二十二日

十一時に家に帰って来る。終日雲が流れて白い雲が流れて，段々に重く灰色の雲が流れて暗くなって，とう〳〵蒸々する夕方，雨粒がぱら〳〵落ちて来る。

二十三日

終日糠のような雨が風と共に煙り又止み，日が輝り昃り，雨が降って止んだ。午後，原瀬の所へゆき，夜上原サンに行って来る。

二十四日

晴。風が涼しい。午後半日，お玉様[16]が来て遊んでゆかれる。夜，江波の所へ行く。緑牡丹を見にゆく心算だったが，丁度宮田も来て，とめられてしまふ。

二十五日

夜，田辺サンに行き，遅く帝劇に緑牡丹を見にゆく。出物は「風塵三俠」（新曲）。これは，先達の「四郎探母」のように，唱ふ所が多くない。虬髯公（賽三勝）の武舞めいた見えがあり，紅払女（緑牡丹）の剣の舞ひがある。この二つが看て面白いものである。も一人李靖（張鑫齡）が居るが，前二人から見ると，唱にも白科にも仕草にも落ちて居て，見ばえがない。緑牡丹の剣の舞ひは，思ったよりつまらない。緑牡丹はこの芝居に古装を用ゐたらしいのだが，それは我々の眼から見ると，丁度天勝一座の衣裳を思はせるような（剣の舞のところ）もので，聯想観念からか，何だか安っぽい感じを持ってしまった。舞ひも，日本でもなし，西洋でもなし，型式的なくせに，美しくない。

支那芝居といふやつは，非写実的なくせに，いやに現実的だ。それが大変にプリミチヴな感じをわれ〳〵に与へる。例へば，野蛮人芸術乃至農民芸術に対する興味だ。（そのくせ，古い古い伝統は，殆ど末梢的でさへある細かな技巧に，一々うなづかれるのだが。）そこらに原始的な，古い古い発生の懐かしい黴の匂ひがあり，そこらにわれ〳〵嶌国根性のものの持たない，大国民的な羨ましいまぬけさと，大様さとがある。そして，自分はそれが好きで，それが見度かったので，そして見て来て，満足だった。

二十六日　日曜日

午後，遠山五郎氏を尋ねる心算で家を出たら，駅までゆかないで，三沢と村田が，自分の所を尋ねようとするのに出会ったので，共に引かへす。麻雀をしたり，利口な話しをしたりして，二人は結局夜の十時前まで居る。

二十七日

昨日から今日へかけて，暗くて降り出しさうで，降り出しさうで涼しい。けれどつまりは，降らないでもって居る。午後，遠山サンを尋ねる。丁度遠山サンは，文チャン[17]を画いて居るといふので，一時間程して一緒に小城サンに行く。遠山サンは文チャンを画き上げて暫らく話して，三時半には帰ってゆかれた。兄が行って居たので十時近くまで居て，兄と一緒に小城サンを出たが，結局二人は恵比寿でビールを飲んで，兄は又，小城サンに行ったので，自分は終電車で家に帰って来る。

二十八日

十一時二十分の汽車で鎌倉[18]に来る。

東京駅でポオの散文「アッシア家の没落」を買って，汽車の中で始めの二篇（アッシア家の没落）と（赤き死の仮面）を読む。夜，ママと久顕サンと子供達三人と海浜博覧会[19]に行って見る。博覧会は毎年のものであり，其上海の風は夏にしても涼し過ぎた。帰って来てから（まるで例外のないのに驚くのだが）一時まで座敷でママと話してゐる。

二十九日

幾分灰色がかった夏の空から，昼前の日がヂッと照りつけて居る。それは，七月末の昼前の海の上を渡り，絶えず樹々の葉をざわ〳〵鳴らし，低い峯続きに吹きよせ吹きよせる涼しい風には全く係はらずに，ヂッと照りつけて居る。あんなにも遠く静かに見える海から，明らかに潮の匂ひが其風に乗って来る。目の前の花壇から赤い花の，紅い花の，朱の，黄色の，葡萄色の，牡丹色の……それから，椿や厚い角質の葉の群の刺すような白の……光がギラギラと何やら悩ましさを持って居る。ここに二つのものが交叉して，全く反対な二つの者が，各の二つの特質を少しも傷つけ合ふことなく，全く無関心に交叉して居る。縦に一面にヂッと夏の日が照りつけ，赤い花の，朱の花の，黄色の又，銀色の……光が放散し，そこに何やら悩ましいものがある。横に真夏の昼前の冷たい風が吹き，遠い海の潮の明らかな香が流れ，そして其れらを導き迎へる優しい窓があって，ここに明らかに快い思ひが漂って来る。

私はポオを――全く七むづかしいポオを一行一行読んで居る。（アルンハイムの地所）！アルンハイムの地所に入ると，それは正しくアルンハイムの地所である。だが又，アルンハイムの地所は，幸福なるエリソン君の『全く物質的な美の新様式』と，何如〔ママ〕なる点で何処まで，又何んな風に相関係して居るのか――それは恐らくポオのみが知って居るのだらう。恐らくは，当のエリソン君にもわかるまいかと思はれる。何故ならば，アルンハイムの地所には，第一に「戸外で自由に運動をするといふ単純な，全く肉体上」の幸が欠けて居るらしい。――少くとも，現実的な……狐狩りの，又田を耕す農夫の，全く肉体上の幸福からは，少なからぬ距離があるらしい。さて，第二に，そこには，「女の愛」の片影すら見出すことが出来なかった。第三に，エリソン君の「野心の蔑視」に就ては――全く正しかったのかも知れない。何故ならば，第四の「須臾も撓まざる追求の目的」は，実に野心の源泉であり，若しくは野心そのものでさへあらねばならぬからである。それならば，第三の「野心」は，当然「高級の天才の必然の野心」では決してなくて，風俗の対相対的なる野心を味意〔ママ〕すると思はれるからである。そこでエリソン君の幸福に就いてならば，それは恐らくエリソン君自身の外は，全く正当であることは出来まい。或はポオだけが間違って居たかも知れない。或はエリソン君の幸福の四つの原則が，到底充分にエリソン君の奇体な復〔複〕雑な哲学を説明し得べくもないのかも知れない。

さて，自分は昨日同じくポオの「アッシア家の没落」と「赤き死の仮面」とを汽車の中で読んだのを思ひ出す。自分は間々，理性で頭から否定して居る事実に，平気で（不思議にも）引入れられる感情を何度か経験した。処がポオは，自分を不思議に理智的に引入れる――そして，猶不思議に，感情が全く反対に撥ねかへって来てしまふのだ。或は，そこに汽車のがたがたと人々の喃々とがあって，感情をして想像乃至幻想に従って走らしめず，現実へ現実へと引きもどして居たのかも知れない。

さて自分は，全く馬鹿げて居るポオを，更に読むこととしよう。白中，又小さな蝋燭

の仄かな光の下で。

―――――――――――――――――――――

午後，昌道[20]，百合子[21]，綾子[22]，それに橋口，女中達と同勢引つれて，海へ行く。

三十日

朝のうちに海に行って来る。

ポオの「ランドアの屋敷」「早過ぎた埋葬」「細長い箱」を読んだが――題材以上のさしたる象徴或は意義――必然性を探しあてることが出来ない。そこには，鋭い理智とすばらしい想像とが，最高処で平行して居る。これは不思議ではないか。そこには全く明らかな絶対的な特異がある。それがポオである。だが又そこには目的がない。それ故各篇は断片であり，おはなしである。そこには，こりかたまった執念な忍耐があり，同時に又無目的で，やりっぱなしで，全く持続的な忍耐がない。そこには只，感情の特異がある。若しもそこに目的があるとすれば，それはその感情の特異そのものであり，又その刺戟――苦痛，悲哀，絶望，恐怖であり，又その怪異の快感或はは〔ママ〕影響である。

三十一日

午後一時三十八分の汽車で，昌道をつれて東京に帰って来る。

（道哉の墓にて）
✓汝が墓を問ふ人なくに汝が基に醜草生ひて繁りたりかもよ
✓汝が墓に人の問はなく醜草の生ひて繁りて人の問はなく

八月

一日

午頃から蒸々して，光が隠れた。だが，気持のいい夕方もなく，夜にかけて僅かな中途はんぱな雨粒がぱら〳〵降った。晩になって，江波と原瀬がやって来る。麻雀をして，十一時過ぎまで遊んで居る。

―――――――――――――――――――――

夜十一時半に友達を帰してから，私は私の室に小さな電気を灯して，机に向った。私にはこれからしなければならない事があった。第一に一匹でも私の室に蚊が鳴いてはいけない。私は蚊やり線香を束にして焚いた。私は机に向って薄暗い室を見まはした。机の上も机のまはりも，雑然と物がちらけて居た。室一面にはびこって居る，机に掛けた

大きな印度更紗――印度赤と土色と藍とテルヴェルと，そして白が。銅製の花立に立てた異型な蕃人の五つのパイプが。両手を胸に押しあてて蹲って居る，同じく蕃人のやに色の二つの土偶と，同じく蕃人のダクダクツ・サマクから求めた二つの怪異な木彫蕃女立像とが。更に，私自身の彫った蕃童の頭が。更に支那芝居の恐ろしい五つの隅〔隈カ〕取り。雑然とつみかさねられ，うちひろげられた本，赤い本，黒い本，絵具箱，筆の束，取りとめのない画稿の数々，かけらのような陶磁器，埃りだらけな籠，壁，窓掛。

其の間に蚊が一時に鳴き立てて，忽ち死に尽して静かになった。だが其の間に埃とくだらない物で，足の踏み場もないまでに埋った私の小さな室は，線香の煙でむせかへって来た。勿論，窓と扉とは〆めきってある。少しの風もない中に，濃い紫の煙が暗い電燈のまはりに流れるのが見えた。暑さが小さな室を押しつけて居た。私はしてしまはなければならない。だが又私は，ぼんやりと机に向って待って居る。私はしてしまはなければならない。だが又私は，目を開いて居るにさへ堪えなくなって来た。室中がむせかへるような煙の中に，ぼんやり霞んで来た。咽がいがらっぽく乾いて，頭がくら〳〵重くなって来た。目の心が痛くなって，物がギラギラして来た。私はそっと目を閉ぢた。熱いものが頬を伝はって，ぽろっと膝に落ちた。私はきつい酒に酔って，益々頭が冱えたようだった。あたりに全く物音が絶えた。虫けらが窓の硝子を這ひまはるだけだった。雲が屋根の上まで垂れて居るのがわかった。外でも空気は動かなかった。中途はんぱな雨が，ぽたぽた土に吸はれた。私は室と一緒に，床と一緒に，椅子と一緒に，私の体が，私の頭が，息詰まる煙りの中に，暗い霞の中に，目に見える無の中に浮び上り，又沈みゆくのを感じた。ゆるやかに，けれど大きく，それは大きな船が大洋の大きなうねりにのって，自ら揺れるようだった。総てのものが私の小さな室――箱詰めになって，外の一切と交渉を絶った。私が此の箱の中で動いても，それは煙と暑さと居苦しさと，ほんの少ばかり場所をかへるに過ぎない。物を取って投げた処で，外の世界は少しも傷つかない。汗がぢっと皮膚に渲んだ。私〔ママ〕しは殆ど叫びそうになった。だが幸ひに，声が私の口の外で白い息気になってしまった。そして私は，叫ばずには居られない気持で，苛々いりついて来る。それは，世の中に最も意地悪い悪意の為の悪意のようだ。一つのものの二つの現はれ，二つの異った現はれの一つの意図――敵意のように思はれる。だが又，私はしなければならない。私はしなければならない。して了はなければならないことがある。だが又それは何だ？　全くだ！　あゝ，それが私に解るくらひなら。

二日　日曜日

晩，江波の処へ彫刻を取りに行く。原瀬が来て居たので，遅く十一時迄も居る。

三日

午後，原瀬と石崎氏の処へ絵を画きに行く。今日も亦帰ったのは，十二時を過ぎる。

午後，雨が降ったり止んだり。

四日

晩，江波の処へ彫刻を取りに行く。今夜月蝕で，月は明らかに欠けてゆき，九時二十分には全く闇となる，けれども亦十時半には，常にもない満月が明るい。

帰ると，久武[23]が来て居る。

五日

朝雷鳴，降雨烈し。どうやら晴れ。

晩，久顕サンと新井の方に散歩。

夕方，梅子叔母様[24]が見え，昌道も一緒に帰ってゆくと，あとが静かになる。

六日

朝から雨が降って居たが，止んで日が少しばかり。再び午後雨が少し。夜，久顕サンと散歩する。

七日

晴れて涼しい。夜，久顕サンと神田まで散歩がてら買物に出る。

八日

石膏屋は一体，いつになったら来てくれるのか。

今日から早くも秋に入った。晴れて日はがん〳〵と照りつけるけれども，空は青く高く，白い雲があとからあとから流れて，風は涼しい。

夜，神田に出る。

九日　日曜日

風が野分めいてくる。空気が澄んでくる。平凡な日が平凡に過ぎてゆく。

少しばかり苛々する。朝は六時か六時半か，或は遅く七時に起きる。すぐにパンと紅茶で朝食をとる。バタとマーマレイドの外に，チーズのある時がある。サーディンのある時がある。ソーセイジのあるときがある。ポークがある時がある。卵かスープがある時がある。稀にキャビアがある時がある。紅茶のかはりにコーヒーを飲む日もある。それから，此頃は，朝のうちに草花に水をかけてやる。草花といったって，小さな花壇と少しばかりの鉢に植ゑられた孔雀草，葉鶏頭，朝顔，サルビヤ，マーガレット，菊，エゾ菊，紫苑（あゝ，おにのしこぐさ！）それに名も知らない草が二つ三つと，梅の鉢だ。それから何をするかわからない。新聞か何か読んで，机に向って，歌を唱って，午後は

昼寝をする。夕食後はよく散歩に出る。夜は十一時半か十二時か，或は十二時半まで起きて居る。よく寝つく。忠坊[25]が毎日遊びにくる。兄[26]は家に居ない日が多い。

今日は，母[27]と英子[28]サンの処の総勢とを引出して，夕食後，新井の町の方に出て見る。町は明くても，人々はせかせかして居る。花屋には，ろくな花がない。小ざっぱりしたカフェーで，熱い紅茶にウィスキーをおとす。もう月がすっかり遅くなって了った。石膏屋は一体いつ来てくれることやら。少しばかりいらいらする。

十日

一日涼しいが，風がひどいので，埃っぽい。秋が近いので情ない。

✓草木の葉白くするどく光りたり此の頃うるさき蜘蛛の糸切る。
✓檜葉の夏芽どくだみトマト萩の葉を秋めく朝日貫き澄める。
✓みんなみよ白雲立ちぬ青高く秋めく空を由々に昇り来。
✓もくもくとかさなり立ちし夏雲の直(ただ)に日を浴びし背(せな)の燃えはも。
✓若桐の青き広葉の秋立つとむしばみみえて入日に揺るる。

十一日

今年になって，初めてひつこく自分を訪れたかなぶん！ 電燈のまはりにぶんぶんかなぶんが鳴いた。何故か大きな奴はやって来ない。玉蟲色の中位ひのと，青光りのする稍小さいのと，それから赤い小さな奴が沢山。不思議に懐かしいかなぶんだ。私を悩ます。私を悩ます。私の本の上に落ちる。耳をかすめる。髪の毛にもぐりこむ。だから私は，夏の夜でも窓をしっかりと閉めきって置く。それだのに，やっぱりやって来るのだ。そこが懐かしいのだ。だから私は電燈を消して，一本の蝋燭に火を灯す。

死にかけの蚊と蚊蜻蛉とはすぐに焼け死んでも，かなぶんはひつこく飛びまはり，落ち倒れては又鳴きはじめる。風のないこの室では，蝋燭の焔は真直に三寸も燃えて伸び上って居る。物の影が四方に広がり，夜が更けると静けさが深く深く，空気はちっとも冷たくならない。影は不思議ではないか。近い硝子戸の上に，なま〳〵しいものの形を移し〔映カ〕，遠い壁に，それは奇妙にふくれた物々しい黒い塊を映し出す。私は暫らく此の悩ましい，暑い，闇の中の光，光の中の影の中に，かなぶんに敵対し，忍耐強く彼等の横行を敢て頬笑む。

だがかなぶんがやうやく労れて来る頃には，私も亦労れて，油のような汗を拭ふのだ。私は忍耐を捨てて，かなぶんを丹念に捕縛する。私はそれを一つ一つ無造作に地獄に投げ入れる。筆洗の中には，絵筆を洗った汚水が充分に用意されて居る。私は直ちに，それを彼等の牢獄に撰定する。私は蝋燭の光の下で一目見た。汚ない水に浮いて，かなぶん達は魯鈍な動物の本能で互にしがみつき，只々上にならうとしては，下になった。私

はもう見ない。だが私の右の耳は，今だって，彼等の地獄の葛藤を聞いて居る。幽かな，かさかさといふ硬い翅と脚とのもつれを。蝋燭の焔は些の同情も，些の嘲笑もなく，堂々三寸の光を人形達の顔に――極端な陰影に依って，其等は恐ろしい形相を与へられた――まともに投げ，コップのダリヤは，腐り果てた空気の中に，力なくしなだれた。悪いもの――大きな灰色の蜘蛛が，ぎごちない足どりで机の上を横に這った。

✓とざされしこの部屋の中に三寸の焔動かず燃ゆる蝋燭。
✓かなぶんがかすめしあとをちさく揺れまた動かざる蝋燭の焔。
✓かなぶんはうすくらがりを鳴きまはりたまたま火にふれていやもし狂ふ。
✓水に入れしかなぶんどもはかたみにししがみつきつつ下になりつつ。
✓蝋燭のほかげ動かず夏の真夜暑きにかててかなぶんが飛ぶ

十二日
✓夏の真夜ひたにひそまる机の上どろぼう蜘蛛がふるへふるへ這へり。

夕食後，兄と新井の方に出ると，あとからふでが来客を知らせてくる。帰ると，江波，原瀬，宮田がつれだって来て居る。麻雀をして十一時半に帰ってゆく。今日は，午後驟雨あり。

✓白雲は大空を飛ぶ南よりあとよりあとより白雲が飛ぶ。
✓待ちしもの驟雨来たりたり庭草も木も吾(あ)も一せいにはねっかへるかな。
✓火ともせばぶんぶん鳴きて飛びまはる盲にもあらず　かなぶんなれ〔汝〕は。
✓火を欲りし火に入りて死に猶悔いず　かなぶんの罪をひそかに泣かゆ。
✓かなぶんよ夜は更け過ぎぬあかし消して我は寝もと思ふ　汝はあどかする。
✓夜の蜘蛛忽ち□□□(来たり)きたり蝋燭を攀ぢ上りころげおち忽ち消えしかな。

十三日
午後，雨になる。但し，降ったり止んだり。荒れ模様だ。

十四日
天候は険悪でありながら，何のたいしたものもない。暗い不気味な雲が飛んだが，又怪しげな風がざわめいたが，実際は梅雨時のような雨が止んだり降ったりしただけである。夜になって，遉に篠つくような雨が降ったが。

十五日

きまぐれな梅雨時のような天気は，平気で続く。夕方前，神田まで行き，夕食後，久武と新井に出る。

十六日 〔欄外に記す〕［日曜］

きまぐれな梅雨時のような天気は，平気で続く。其の上，風は野分めいて荒れ，雨は更に烈しく，又ぽかんと止んで日が照る。けれども亦，雲は限りなく飛んで，雨を投げる。今日は早く，十時半には床につく。

十七日

天気は決してよくならない。風は益々荒れる。頭ががみがみ痛く，気がくさくさねぢける。

十二日の日から武さんが来て，ずるずると宿って居たが，兄がまた決して帰って来ないので，諦らめて今日午後帰ってゆく。夜，江波を訪ねる。十一時に家に帰って来る。少しばかり落着いた気がする。明日は，天気になるだらう。そして，石膏屋が来るだらう。

十八日

天気は決してよくならない。体の具合は又あまりよくない。にも拘らず，石膏屋は来ないし，朝から晩まで一人なので，気分は極めて我儘だ。

毎日毎日絵を書く〔ママ〕。油でやる。水彩でやる。ペンでやる。本を読む。庭に出て草花をいぢる。ぢれったいものは沢山あっても，そして何処かでは，それはちくちくと間断なくやって居ても，自分は近頃は怒らない。蚊が刺しに来る程にも，それらにはかかづらはない。自分はそいつらを束になるまでためて置いてやるのだ。何故なら，今は惜しいのだ。だから今は目をつぶって居るのだ。何故なら，近頃は日日が非常にうまくいって居るから。朝は五時から五時半の間に起きる。そして，ひよひよと情ない風がふいた処で，自分は元気がいいのだ。午前には，実にたっぷり時間がある。午後は必ず一時間の昼寝をとる。それから風呂を浴びると，又元気が出る。

三度三度パンを食べるから，腹がふくれ過ぎることがない。夜は濃いい〔ママ〕紅茶かコーヒーの熱いやつをやるから，三度元気が出る。夜はちっとも寝むくない。自分は明日を思ふから，大概は十二時半か一時に床につくが，図に乗ると，二時半までも平気で起きる。翌日も亦何から何までうまく行くのだ。夜も亦実にたっぷり時間がある。

十九日

十時に石膏屋が来る。十時半に兄が帰って来る。忠久がまる半日遊んで居る。夜は，兄に引張り出されて，新井に出る。

二十日

晩，鎌倉に来る。叔母様と久顕サンと三人で，夜中の三時を聞くまで喋って了ふ。

二十一日

三沢寛[29]様

どうだい，とてつもないハイカラなペーパーだろ。

それは，多少は手がふるへたり，気がわく〳〵したところで，俺だって，たまに，こんな紙を使ったって，それが何が悪い？　だが——

さて，人助けにもなるのならば，注射をしてやるに何の面倒はないけれども，それにした処で，注射といふ奴は，何時でもチクリといたいものだといふことを云って置く。だが又俺は俺で，正当な報酬としても，俺自身に多少の休息と慰安とを与へてやる為に，昨日こっちにやって来た。五六日は帰らないだらう。君の仕事場を尋ねるのも，それから後になるのは，極めて自然だと思ってゐる。それまでにせいぜい理想的にやって置き給へ。

俺はまた，今年もまだ〔ママ〕二科にも，院展にも，何処へも出品しないことにした。そして今，極めて気楽だ。だが又それは，君の羨望を馳る訳がなし，又僕の嘲笑乃至皮肉を少しでも表示しはしないだらう。何故なら，これは単なる正直な事実なのだから。

明日は江波がここに尋ねて来るだらう。最近，江波と大いにポン・チーを戦はせることになって居る。多分，飲料か何かが，天井からぶら下ることになってゐる。だが又，君の仕事にさわることを恐れるから，君を誘ふまいと思ってゐる。で，君は安神〔ママ〕して仕事が出来るだらうし，又君の仕事の終った時には，改めて君の挑戦を観〔歓〕迎しようと思ってゐる。

では，炎天下の海辺に，どんな人々がどんなにして集って楽しんで居るか，又夜，停車場の前の綺麗なカフェーで，人々を涼しくする為に，どれだけのアイスクリームがどんな風に溶けて流れるか，そうした総てのことを略して，今日はこれで失礼する。

鎌倉ニテ

久功

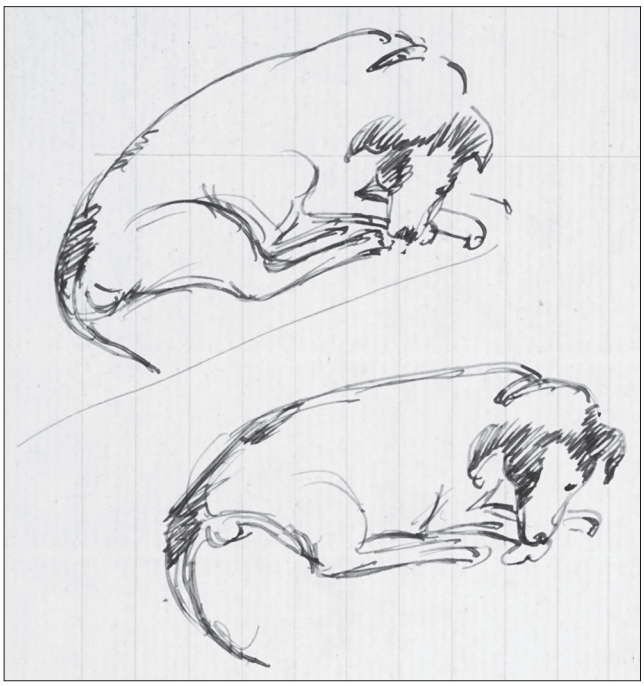
午後三時に譲二叔父様[30]が来られる。今日は，直矢叔父様[31]の満二年の御命日なので，御座敷にお供へ物して，心ばかりのお祭りをする。夕食後，久顕サンと町に散歩に出る。

✓海見ればきみをしぬびぬ苅屋の海　沈みしし人のいのちはもあなや

二十二日

✓向つ山　山近ければ朝日には　群樹の幹の白のしるしも

✓向つ山　まだら禿山朝日さす　雲の影見えて静かに動けり



今日は，石丸サンの法会があるので，梅子叔母様は子供達全部を連れて出京される。譲二叔父様も朝帰られたし，久顕も，叔母様と一緒に東京に帰る。自分は独り居て江波を待ったが，とう〳〵やって来ない。

チェスタートンの「バーナード・ショウ」を読み終へる。だが，自分は今，此の書に就いて，その如何なる点に就いても，ハッキリと何か云ふことは出来ない。何故なら，自分は一体何日かかって此の本を読んだだらう。多分，八月八日の晩に第一章を読んだ。多分，八月九日に第二章を読んだ。そして，多分十一日の晩に第三章を，十二日の晩に第四章を，そして，第五，第六章をそれは切れ切れに，今日は三頁，次に三十頁，次に全く読まなかったり，そして今日，最後の七十頁を読んで終ったのだった。だが又，自分は全く無責任に次のように喋っても，ちっともかまはないと思ふ。

此の書は，全くショウのもののようにわからない。或は，もっと正しく云へば，ショウのもののように人をこけおどしにおどかす。同時に此の書は，ショウのもののように愉快で面白い。だが又此の書は，実に最も簡単にショウを描いたものだと云へる。全くこれより簡単には，ショウは決して描かれない。描くと自分は云ふ。全く此の書は，ショウをあらゆるポーズと，あらゆる光線との下に，正直に描いて居るのだ。そして，ショウを最も簡単に，而も最も明確に描くには，これだけのポーズと光線とが絶対に必要

なのだ。何故ならショウは，例へば十のものの渾然たる融合――Xでなくて，明確なる一の放散的な現はれだからである。前者は，周囲をどうどう廻りして居る間に，Xはひとりでに凝結して形をとってくるに反して，後者は一を的確に把へ得ないかぎり，放射光は全く骨抜きの状態に残されるのである。而も一は，此のあらゆる放射光を一々説明し得べき一でなければならない故に，あらゆるポーズとあらゆる光線とのもとに，吟味せられなければならないのだ。

扨て，チェスタートンの捕へた「一」は，彼の論じ研究した範囲内に於ては，極めて正しかったようである。彼は，ショウの持つパラドックスを，彼自身の極めて雄弁なるドクマチック　パラドックスを以て完全に征服した。「此のパラドックスは智的に単純なショウには解らない。パラドックスだから解らないのである。……彼には結婚のパラドックスを理解することが出来ない。従って，彼には結婚が理解出来ないのである。即ち婦人は家庭の頭目でないから，一層家の中に居るのだといふ様なパラドックスが解らないのである。彼は愛国心のパラドックスを理解することが出来ない。従って彼には愛国心が理解出来ないのである。即ち人は単に人道を愛するばかりでないから，一層人間的なのであるといふパラドックスが理解出来ないのである。彼は，基督教のパラドックスを理解することが出来ない。従って，彼は基督教が理解出来ないのである。即ち我々は唯，神話中の一つが真であることを知る時，凡ての神話を実際に理解出来るのだといふパラドックスが理解出来ないのである。……彼は，人生のパラドックスが理解出来ない故に，彼には完全に人生が理解出来ないのである。」といふあたりは，正にチェスタートンの得意の壇上である。彼は此の意気で，又菜食主義者としてのショウをも見事にきざみおほせた。だが又，チェスタートンは，ショウの只一つの点に就いて，深入りすることを避けたかの観がある。それに就いて彼は，ショウにはパラドックスが解らないのだと云った後に，簡単に斯うつけ加へて居る。「私は彼の反パラドキシカルな気質を侮りはしない。智的浄化の法による彼の最も佳い，最も鋭い多くの作品は，此の気質がなければ困難，否不可能であったらうと思はれる。が私は其の旗幟鮮明な短〔単〕刀直入的な心にも限度があると思ふ。」と。

彼が得意の壇上に於て，彼は屢々非常にドグマチックに見えた。にも拘らず「智的に単純でなかった」彼は，彼の最もドグマチックに見えた時でさへ――斯くして彼は，一層深いパラドックスに達したとは云へ――遂にパラドックスに止まったのである。そして，ショウのドグマには，あまりかかづらはないで，彼の研究を進めてしまったようである。何故ならドグマには，何やら音楽的なものがあって，彼を拒んだからである。此の点については，彼自身幾分気がついて居た。即ち，極めて正直に「こういふ工合で，彼の音楽については，私は慎しやかな一人の不可知論者なのである」と云って居る。そして又，斯ういふ訳でショウは，彼がムキになってパラドックスを築かうとした時でさへ――彼は，「智的に単純だった」から，パダドックスは，決してより深くほり下げる

ことが出来なかったのでもあるが――彼の内に，何やら音楽的なるものがあって，彼が最もパラドキシカルな時でさへも，遂に彼をドグマへと引張りこんでしまったのである。ここに智的矛盾が生れて，チェスタートンの俎上に，形もなく切りまはされたとは云へ，ショウのドグマは，まだ全く完全に保たれて居り，而も自分にはショウの魅力は寧ろ，此の彼のドグマにあるように思はれるのである。

二十三日　日曜日

今日も亦自分は完全に独りで，全く平和だった。日暮前になって，花壇に生ひ茂って醜くもつれ合った雑草をすっかりぬきとって，顔を洗って黙って夕食を済ませて，扨て自分は電燈を灯して，杳かな蚊やりの香をかぎながら，がらんとした机に向って居る。日が落ちきると，あたりは目に見えて暮れて行き，物音は漸く薄らいでゆく。

一頃の夕暮らしい響も遠くなり，何処かの活動小屋で，もう倦みきった残りの避暑客を呼ぶらしい安楽隊の哀調も消えた。今は全き静寂を，全く不規則な，全くかすかな夜の響きが，一層深いものにして居る。その中を時偶々鈍い自動車の喇叭の音と電車のきしみとが通りぬけ，更に時偶唐突な汽車の汽笛がふるへ，続く震音が近づいては行きすぎる。そして，私の目の下には，ルイゼ・ニストルレムハミルトンのエレン・ケイが全く単純な，けれども強い熱意の中に，一頁一頁と大きく偉くなってゆく。そこに自分は「過去」に注ぎ度いような優しい涙――こぼたれ易い可憐な心を感じ，子供らしい熱心と義奮とを引きつけないでは措かない，物語りの美しい（字義通り美しく概念的な善の典型である処の），それ故に燃えるような同情なしには居られない女主人公（それは王女様か姫様か，でなければ，も一つ上の半神的少女で，彼女は，にもかかはらず，樵夫とか農夫とか，そういった，或は乞食とかいふ可哀さうな人々に対して常に親切で，正義〖概念的な〗の前には，涙ぐましい強さを持って居り，其上物語りを，より感動的にする為に，彼女は常に肉体的には無力であり，ひよわくなければならないのである）を，硝子の向ふの出来事のように感じるのである。もう海は全く黒くなって，空の中に入ってしまった。更に時偶遠くで，又近くで，犬等の切なる鳴声が自分をすくませる。

二十四日

ニストルレムハミルトンの「愛の使徒エレン・ケイ」（エレン・ケイ。その生活と事業と）は終った。近頃稀に読んだ美しい物語りだった。エレン・ケイが兎角論理的でなかったといふことは，誠に有り得たことのように思はれる。にも拘らず，彼女は常に正しかったといふことは，全く疑はれない。これには，けれども全く何の矛盾もないのである。何故なら，倫理は多少，より運命的である故に，それは本質的に幾何学的論理と全く合致するといふことは考へられないのである。そして，或る人々がいふように，精神的論理といふことが許されるならば，エレン・ケイは又全く論理的な倫理哲学を持って居た

のである。だが又，彼女の幸福と難点とは，彼女の総べての人〔生〕世観，社会観が，彼女の消極的な楽観主義――性善説の全き確信の上にかかはって居ることである。其故彼女が全く正しかったとは云へ，ロマンチック（理想主義的）であり，一面的であるとせらるるのも亦当然のようである。――其の単純さこそは，彼女自身を益々純潔に輝かし，彼女の意志――熱誠をいよいよ一層燃えしめ，又それらに全く不変的な耐時性を与へたものであるとは云へ。

――――――――――――――――――――

午後，海浜ホテルのオーディトリウムにダンスを見にゆく。曲目は大体次のようなものである。

Military Hungarian Dance ……A.Garf
Dance of Love ……Mura & Koka Shipoff
Pas de deux ……M. & K.
Boy and Dance……Mrs. Shipoff & A. Garf
The Fisherman and Pearl……M. & K. Shipoff
Fantasia Walz……M. & K.
Norwagian Dance……Mrs. & A. Garf
Street Dance……A. Garf
Dance with reeds……Mura Shipoff
Mazuruka……Mrs. & A. Garf
Camps of Gipsees……all Members

此のマチネーのお客は非常に少なくて，非常に悪かった。其処に来て居たお客は，小さい子供達とハイカラな洋服の少女達と，耳かくしの艶やかに着飾った年頃のお嬢さま達と，そして断髪の新らしい奥さん達とだった。それは正に，ここの粗末な仮小屋ぢみたオーディトリウムには，似合はしくない上等なお客さん達だった。にも拘らず，彼女らは全く最も悪い型の日本人だった。彼女等は只，初めから終ひまで静粛にして見て居た。全く只それだけだった。ダンサーは，彼女等から些の反応をも受け取ることが出来なかった。彼女等は，全く今何を踊って居るのか，何んなことを踊って居るのか，わかって居るのか，わかって居ないのか，わからなかった。（勿論，行〔興行〕興師の方にも大きな落度があった。プログラムは全くくばられなかった。前夜のプログラムが隅に粘〔貼〕られてあるだけだった。そして，実際はそのプログラムが役立って居たのだった。順序も出物も，プログラム通りに進行して行った。只其うちの二三を全然ぬかしてしまっただけだった。自分が上に書いたプログラムも，其れから取ったもので，或は一つ二つ落ちて居るよう

でもある。）それにした処で，此の立派なお客さん達は，英語の一くさり位ひ読める筈の人であり，オーディトリュム〔ママ〕に居る心得位ひあってもいい人々である。又若しも彼女等がそんなことを超越して，彼女等自身に正直であり過ぎた処で，一つ位ひ特に面白かったり好いと思ったり，好きであったりしてもいいのである。にも拘らず，彼女等は全くわかったのかわからないのか，面白いのかつまらないのか，わからないのである。只，初めから終ひまで，静粛にして見て居るのである。其故或は，華やか過ぎる舞台になれたダンサーは，引込みがつかなくて困って居たりするのが，明らかに見えて居たのである。だから其処には，粗末な小屋と小さな楽隊と，そして殊更彼女等自身の何やら大きな不足物から，劇場的な空気を何等感ずることが出来ないのである。

さて音楽は又，極めて貧弱な楽隊――二つのヴァイオリンと一人の喇叭と，そしてピアノとで奏かれた。これは実に必要以下だった。そして，其れらが無理やりにも必要を充たして居たのであるが，又実際は楽人等は決してそれを意識するでもなく，又それについて努力するのでもない。彼等は，より内面的なる乃至気分といふようなものとは全く無関心に，外形的なメロディーとリズムとを叩き出し，吹き鳴らした。

舞台は，三方に真紅の薄い絹を垂らしたもので，それに極度の倹約さに於て全く気のきいた，極めて簡単な光を投げたり消したりした。それは，昼間の明るさの中に，何の秘密をも隠して居ないにも係らず，それが有るといふことが全く当然であり，而もその他に全く少しばかりであるとは云へ，何かをもって居たといふことは，不思議といふことが出来る。

さて最後に，最も重要な，当然重要な中実〔ママ〕，踊に就いて云ふならば，それは明らかに二つの種類のものである。プログラムに於て明らかな如く，ミセス・シッポフとガルフと，そしてミュラ・シッポフとコカ・シッポフとは，全く異ったジェネレイションに属し，そして又此の二組の間の踊にも又，丁度それだけの差があるのである。即ち，ミセス・シッポフとガルフとのミリタリイ・ハンガリアン・ダンス，ボヤール・ダンス，ノルウェジアン・ダンス，ストリート・ダンス，そしてマヅルカは，表題のバレー風な外面的な解釈，舞踊的リアリスチックな表現で，マヅルカの如きものは亦，全然簡単な伝統的な形式だけを以て片づけられるのである。（伝統と伝統的なるものと，特殊な技巧とについては，ここでは云はない。） 自分は此の種の――例へばノルウェジアン・ダンスの如きローカルカラーの濃いもの――叙情的な，単純な，粗朴〔素〕な，そして時に滑稽な――本質的には舞台のものでない，例へば譬へそれが舞台の上であったにせよ，ノールウェーの百性〔ママ〕さん達によって，もっと下手に，もっと図に乗って勝手に踊られる方が好もしいようなものが好きである。勿論ここでは，芸術的な高下は全く問題の埒外にある。扨て次にシッポフ兄妹コカとミュラによって踊られたものは，正により近代的であり，より舞踊芸術的なものである。それは，ダンス・オヴ・ラヴ，及びゼ・フィッシャーマン・アンド・パールの如き文学的説明的なものがあったにせよ，自ら又より内面的であり，

抽象的なものである。そして，此の兄妹の方のは，ハンディキャップなしに，又横道的興味なしに，相当に観賞せらるるものである。殊にミュラのダンス・ウキヅ・リーヅは，自分が此の貧弱な舞台を超えて，無愛想なお客さんを忘れて，全く劇場的雰囲気なしにさへ思はず拍手したものである。それは一段と高い抽象的統一であった。そこには，情熱的な強いものがあった。真紅のスクリーンは輝いたようだった。もっと的〔適〕切に云へば，彼女自身の中により高いものが呼吸して居た。ガサツな音楽が一層空気を狂ほしくした。

最後のキャンプ・オヴ・ヂプシースの中の，コカとミュラのソロもよかった。だが又，ミュラのような若い，若過ぎるものが，ガサツな音楽と共に飛び過ぎたのも事実だった。其処には，内容のある静けさが少なかった。内容のない処の静けさは退屈である。内容の足りないものを外形的飛躍で埋めようとするのは，巧者の常である。外形的飛躍は内容を落さないが，内容の欠除〔如〕は外形的飛躍を幾分軽くするものである。

夜八時過ぎに，梅子叔母様が子供達をつれて帰って来られ，一時までお座敷で話して居る。

二十五日

朝から煙るような雨が降り，一寸の風もなく，蒸々しと湿ってゐる。

二十六日

終日，さんさんと又ひよひよと雨が降りつづける。

二十七日

豪雨は，東京を中心とする関東一部に，盛な災害を置いて去った。今日は，晴れて暑い。夕食前に浜辺に出て見る。嵐のあとは，いつも見るようなものである。貝など拾って帰って来る。

二十八日

午前中に，子供達を引つれて海へゆく。なめ〔滑〕り川の川口で貝を拾ったり，舟に帆をかけたり，砂をほったり，その間に由比ヶ浜までいって浪につかって来る。六時五十二分の汽車で東京に帰ってくる。汽車は避暑帰りの客でこんで，暑かった。帰ると江波から至急の手紙が来て居る。中嶌の容態が益々よくないこと，其為に中嶌の兄さんが，江波の処へ出て来て居られること，出来〔ママ〕らば，自分にも，中嶌の兄さんに会って置く方がいいから，本郷まで来てほしいことが書かれてある。が日附を見ると，二十五日とあるから，自分は已に遅過ぎる。暗い気になる。

二十九日

鎌倉では，起きるとから何千といふ蝉になき立てられたのに，今朝はまた，静かで曇って，そしてあっちこっちで，こほろぎが鳴いて居る。最初のこほろぎの声は悲しいものだ。

中嶋の話を今少しくはしく聞く為に，朝から江波を尋ねる。けれども亦，様子は全く変った。そして結局十一時になって，江波と江波の弟と三人で銀座に出，松屋にハニベ社の展覧会を見る。会場で武田桑氏に紹介されたが，ゆっくりは話さなかった。炎天下を三人ぶら〳〵歩いて日本橋に出，河岸で寿司をつまんで，二時に江波の処へ引上げる。一時間寝ころんで，風呂を浴びて，四時過ぎに江波と美術学校に出かける。三沢と小室と村田とが居た。ぶら〳〵皆で日暮里に出，小室，村田と別れて，松平にゆく。三人は更に本郷にまはって夕食をとってから，又，江波の処に行く。丁度，原瀬が来た処だったので，三度落ついて，十時半に暇して帰ってくる。

三十日　日曜日

今日も亦，暑い。午後，原瀬と三沢が来る。夜，久顕サンと新井の方に出る。

三十一日

昼食を食って居る処に電報が来た。それが，中嶋の死を報らせる。当然，来るべきものであったにせよ，あまりに意外である。一昨日，自身が中嶋に就いて聞いたのでは，二ケ月は保つまいといふ程度だったのだ。其上，二ヶ月前の中嶋は，譬へ弱って居たとは云へ，自分と共に週日の旅を押して神戸に帰ったのである。そして，この二ヶ月は実に殆ど昨日のようにさへ思はれて居たのに。それにしても，内地に帰って居たことは，中嶋の家の人々にとっても，当人にとってもよかったと思はれる。それだけが慰めである。

自分は直ぐに江波を尋ねる。兎も角，自分は神戸には行かないことにする。中嶋が二ヶ月前に全快の日を待ち，仏蘭西行きを夢みて居たことを悲しく思ひあたる。そして，遂に死ぬまで，生きることを全く疑はなかったことを悲しく想像する。更に奥サンと小さい子供達の境遇をも悲しいものだと思ふ。それらに対して，自分が何一つ出来なかったこと，又何一つ出来ないことも悲しい。

帰って来ると，譲二叔父様が英昌をつれて来て居られる。十時半まで遊んでゆかれる。

✓トマトの実今ごろ黄ばみ　秋し立つ　朝日澄みとほる　朝はいたいたし
✓こほろぎの鳴く夜となりぬ　荒れあとの　静けき夜べに　声のかなしく
✓遅く寝る嵐のあとの夜のくだちこほろぎの声のいや冱えに悲し

九月

一日

天気は此上なくいいのに，風が荒い。

二日

今日は，仏蘭〔西脱カ〕美術展覧会の招待日だ。朝，新聞にゴッホの裸体が撤回されさうだとあるので，早くから出かけてゆく。だが已に駄目だった。

さて第一に，カリエールが来て居ない。（カリエールはもう来ないかも知れない）。ローランサンが来て居ない。マイヨールが来て居ない！ 其の上，ビッシェール，マチスが来て居ない。ロートがたった一枚。モディリアニがたった一枚（尤もビッシエールとロートとは，明日，二科会の会場で沢山見られるだらう。）で，今度の収穫はあまり豊かとは云へない。ヴァン・ドンゲンが七枚，マルヴァル夫人が八枚。それらは，こにくらしくうまい。其他では，ドガの三点が遉がにしっかりしてうまい。大家だ。アマン・ジャンはこれも遉に大家であるが，自分には稍縁遠い。自分に近しいものでは，ロートレークの小さな（夢みる人）があり，モデリ〔ママ〕アニの（「赤豆」）がある。［〔欄外に記す〕此の二つは無条件だ。］其他ルノアールのルノアールらしい少女が一点あり――これは，一昨年来た少女よりもずっとルノアールである。

マルケのあっさりした，併し軽やかな風景がある。コッテといふ人は，一寸あきらめきれない人だ。小さな静物などに，すばらしい気持のいい絵を見せたことがあるばかりに。それだのに，此の人に女を画かせると，昨年の「扇を持てる女」のように，今度の「公園の女」のように，鼻もちのならない無趣味を見せる。だが今度の三点のうち，一点の大きな「礼拝に集まるブルトンヌ」は，異様に気味悪くも懐かしい絵だ。デスパニアは甘ったるいが，ブリカールのようではなく，少女や小児のものに，柔らかい可愛らしいのがある。

ゲランの人物は益々気持悪く，コラン，デュランもくだらない。フランドラン，フリエス，マンギャン，ルバスク，オットマン，ラプラードあたりがつぶの揃った所だらう。其他ゴーガンのものが少し来て居たが，あまりよいもの，といふより，自分の好きなタヒチのゴーガンは見あたらない。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□。アニコットといふ人の絵が沢山に来て居たが，版画のような「氷辷り」の二枚など，愉快なものがある。其他変ったものに，ピカビアの美しい奇怪な「西班牙の女」があり，クリスチャンの「カフェーの女」三点も目についた。

彫刻では，オルロフ夫人の「吾が息子」がいい。

オルロフ夫人の他の諸作とパブロ・マースの三点は，興味のあるものである。ブルデルとロダンは沢山あるが，皆好かない。ロダンなら，あくどいロマンチシズムのない，

胸（肖）像をもって来て貰ひ度いものだ。少しばかり失望である。
会場で，江波兄弟に逢ふ。午後，原瀬が来る。

〔欄外に記す〕
［（窓から入った□□光）］
（入 日）

私は私の薄暗い室に居て
（□□□□□□□□）
（窓）
窓を，久しく閉ざした窓を
開けていい時だと思った
（空気が濁って重くなって居た
それが私に親しみ深いものではあれ）

あゝ，何日目の，或は何年目の
日の光だ！　私の薄暗い室に
あゝ，窓から流れこんだ
黄色い弱々しい，そんなに明るく
いたいたしい入日の光だ

よろよろと，けれども明るく
窓から舞ひこんだ入日は
壁にぶつかり，蜘蛛の巣にひっかかって
けれども漸く小さな室に充ち充ちた

けれども先づ
光がまともに光ったところ
私の古い本箱の上に
埃だらけな彫像
四つの石膏の，又二つのブロンズの首に
怪しくとっついた光

それが私の彫像に別な命を与へた
（神が送ったのか，悪魔が憑いたのか
私は知らない）
埃の中に，薄暗い室に
静かだった首等（ら）は

悲しい命に蘇って
恐れに震へ
喜びに怯えて
キョトキョトとあたりを見まはした

あゝ，だが，もっと悲しかったのは私だった
首らよ
驚いたか，驚いたか
私はここに居る
私が見えないか
お前達の主人だ，友達だ
おゝ，だが，お前達は
なにやら怪しい希望を見でもしたのか
別な運命がお前達に呼びかけでもしたのか
私の方を向いてくれ
私を見てくれ
私はお前達の主人だ，いや友達だ
お前達は酔ったのか
お前達は逃げようとでもするのか
黄色い誘惑がお前達を狂はせたのか
新らしい光がお前達を盲にしたのか
音もない嵐がお前達の情(こころ)を奪ったのか
あゝ，お前達
私を捨てようとするのか
私を顧みようともしないのか
そんなに突然に私を忘れるのか
お前達の主人だ，いや友達だ
去っちゃいけない
お前達は私のものだ
私の命令するのがお前達に聞えないのか
どんな賢しらな力がお前達に憑いたのだ
気違ひだ，気違ひだ
おゝ，お前達
いっちゃいけない
ここにお前達の忠実な友達が居る

ここにお前達の悲しい奴隷が居る
私は従順な，――お前達のものだ
あゝ，どうか私を見捨てないでくれ
私をみすてないでくれ
どうかたった一目私を見てくれ
私の目を見てくれ
それはきっとお前達を引止めるだらう
たった一目だ
私を見てくれ，私を見てくれ

あゝ，私は呪ってやるぞ
私はお前達を呪ってやる
私は光を呪ってやる
お前達は，お前達は
そんなにもたわいなく私を忘れるのか
強いものが弱いものをふみにじるのか
新しいものが当然古いものを捨てるのか
断たれた道は到底結ばれないのか
お前達は所詮行ってしまふのか
そして私に何が残るのだ
私には何も残らないのか
私には何も残らないのか
私の気も怪しく歪んだ
私は懸命に窓を閉ざした
窓は永久に閉ざされねばならない
窓は閉ざすべきものだった
決して開かれない窓こそ
永遠に頼るべき窓だった

薄闇は私の室に帰った
光の逃げた薄闇は恐ろしいけど懐しかった
（鳥は飛びはしなかったらうな
鳥は飛びはしなかったらうな
そんな筈はない
窓が開いたのはほんの偶然だもの

禍はそんな偶然と一緒に来る筈がない）
私はまだくら〳〵とくらんだ瞳を上げて
恐る〳〵古い本箱の上をさぐり見た
私のものはそこにあった
あゝ，それだのに
信じようもなく姿変って
諦めようもない不幸として――
四つの首は全くぼろぼろの白いかけらとなって
残りの二つは怪しくひびいって
懐かしいものに，小指一指触れるべくもなく
ぬけがらのような形ばかり残って居る

あゝ，それならば
最後に残った薄闇よ
（光には禍ひあれ
偶然の上に呪ひよ，降れ！）
独りをこそ守れとか
薄闇よ永遠なれ
独りこそ，独りこそ
狂ふがいい，呪ふがいい，疲れるがいい

〔×を附す〕

〔三〕
二日

昨夕の力ない夕焼は，今日，一面にどんよりと重たい灰色の空になった。三四日，烈しく荒れた乾いた風は，ひよひよと情けない秋風になった。

チカチカと眩しい白い日は，梅雨時のように暗く輝きを失くした。朝から上野に出かけて，二科会の展覧会を見た。昼までかかってゆっくり見たら，大分労れた。院展は明日にしよう。前からそう思って居たのに，今一度そう思った。だが空は益々暗くなって，空気がじめじめしだした。明日は雨だらう，出来れば今日見てしまはう。だが其前に，少し風に吹かれなきあ。で昨日見た仏蘭西美術の絵葉書を買ひながら，桜ヶ岡の方をひとまはり散歩して来た。帰って来て，思ひきって日本美術院の会場に入った。ここでは靴をぬがされて，薄縁の上を急に軽くなった足がくすぐったかったけれど，中で，田辺の勝サンに逢って，室の真中にあぐらをかいて話しこんで居たら，今度は大変のんびりして来た。日本画は遺がに見る元気がなかった。一つには，彫刻をよく見たかったからでもある。院の中で中食をとってゆっくり見て，四時頃に，とうとう院に居るうちに降

り出した雨に濡れて，家に帰って来た。雨は止まないで，室は暗かった。

四日

今朝方ひどく降りしきって居た雨が止んだと思って起きたのに，本当は霧のような糠のような雨が終日音もなく散って，暗く蔭気に不愉快にした。で何をするのも嫌だ。終日まとまりもなく，石膏に色をつけたり，お茶を飲んだり，空を仰いだり，話しをする人もないから，ひとりで何かかにかちぐちぐして居る。展覧会の覚え書きを一寸しるして置かうと朝から思ひつづけて，とうとう晩になった。夕方，英子サンの処へ行ってお湯を浴びたら，暫らく気が変ったが，又ひとしきり雨が降り出したら，又もとの気のめいったままに帰った。だが又，何をするのでもないから，やっぱり展覧会のことを少しばかり書くことにする。見た順に二科からはじめる。今年は陳列順が少しかはって，全部を通じてアルファベット順になったのはいいが，さて，一つ部屋でも，目録と陳列順とが出鱈目なので，（二科では作品に番号だけしかついて居ないから，一々目録と引あはすだけで，結構気が腐る。これは，不親切だと思ふ。其上，若しも立派な目録の売れ残りが出ないようになどと云ふ寸方〔法〕からこんなことをするなら，尚のこと気持が悪い。）余計な手間と気とを使って，少なからずいらいらした。

有嶌生馬氏。已に出来上った人である。静かに落着いて，何等の焦燥も苦闘もない。特殊な憧れも，従ってそれに対する努力も，かと云って別に倦怠もない。□□□□□□□（斯ういふ人の）□□□□（作として）誠に楽しんで画いて居る。斯ういふ人の作として，当然構図的なひらべったい「牡丹」や「菜の花のある静物」よりも，自分は「窓前雪景」と「山上新緑」とを取る。惜むらくは，斯ういふ出来上った人にも又，出来上った「特殊」があり度いものである。それは勿論，あるといへばある。同じ心境にあっても，山下新太郎氏と湯浅一郎氏と有嶌氏との間には，幾分の相異はある。けれども自分は，今少し顕著な「特殊」がほしい。アマン・ジャンは，出来上った人だ。そして，尚立派な「特殊」をもって居る。カリエール，ピサロ，満谷国四郎――実にはっきりして居る。何千といふ画家が，みんなお互にかうはっきりするといふことはあり得ないことだ。にも拘らず，自分はそれを望むものである。

ビッシェール氏の今度の諸作は，みんな好きだ。中でも小さい「人物」と「魚のある静物」とが好きだ。総じてもうほんの少しぐしゃぐしゃ――うるさいと云へるかも知れない――して居ないともっと好きだ。そして又，もうほんの少し明るい色調があってもいいと思ふ。デュフィ氏。自分は此の人の油絵を好かない。併し，此の「アネモネ」だの，前にいくつか見た水彩のあるものなどのやりっぱなしのもの，或ひは大まかなものにいいものがあると思ふ。深沢紅子氏。今度はじめて見るこの二つの絵だけで勝手に判断するなら，氏の価〔ママ〕うちは，このくすぶったい所にある。此の人が，もっとはきはきしたり，達者になったりしたら，此の人のヴェールは飛んでしまふのではないかと思ふ。林重義

氏の四点はいいと思ふ。自分は「静物」と「孔雀のある構図」がいいと思ふ。色調の取扱ひ方は四点とも全く同じだ。だから，自分の此の撰択は，全く構図的なものから来たと思ふ。だが又，氏自身の興味は，より『赤の』静物，『白と緑の』静物にあるのかも知れない。

〔19行，墨で抹消。判読できず。〕

一つの□□□□□□木下孝則氏と木下義謙氏。自分がほんの少しばかり木下氏兄弟を知って居たことが，木下氏兄弟の絵に対しても興味を持たせるのは当然である。其上，木下氏兄弟が似てもつかない絵を画いて，そして二人で立派な位置を占めて居ることが，更に興味を大きくする。二人とも大きい。だが孝則氏は，丈がずぬけて高くてがっちりと大きい。義謙氏は，丈が幾分低くてぶっくりと横に大きい。ノロデカといふのが孝則氏の渾名で，年のちがふ小さかった自分に（今でも体は小さいが），幾分恐かった。義謙氏は慎ましく，いつも太っていつもにこにこして居た。其後，孝則氏は洋航〔行〕して，ハイカラになって帰った。義謙氏は，其間日本に留って益々真面目であるらしい。そこで両氏の絵を見る。自分は今何も云はない。云ふことを控えるのではない。両手に軍配がほしいのだ。

熊谷守一氏の絵の前に立つ。此の人の絵を見て居ると，色んなことを考へつく。彼は，大山師だ。だが又彼は，俗人どもを相手にするような俗な山師ではない。では，相手のない山が何処にある。相手のない山がなにになる。だが又，そんな山がここに確かにあるではないか。彼は俗が嫌ひだから，山でなければ気がすまないのだ。彼は山が好きだけれども，その山にひっかかるような俗人が嫌ひだから，此の人の山は山をはづれてヂミだ。それならば結局，山ではないではないか。否，彼には最も愉快な山なのである。俗人にはわからない山だから，彼には益々愉快な山なのだ。そこで彼は，彼のたまらなく愉快な独りぼっちの山をさがし山を創造する為に，彼は毎日ぶらぶらして居る。彼がぶらぶらするのは，何もしないのではない。何かかにかぶらぶらするのだ。山はそんなにいつでも，何処にでもあるものではないから，又出来るものではないから，彼は毎日何かかにかぶらぶらする。其のうちに，有形無形の色んなものが出来る。いつのまにか絵も出来る。青い草原に女が寝て居る。草が深いから，女の顔が目も口もない一つの点だから，若いのか，そんなに若くないのかわからない。悲しいのか，嬉しいのかわからない。□□□□□□□□□□□（実は血の通った人間が）暖かく草にうづまって居るのか，力なく草の上にくづをれて居るのかわからない。実は血の通って居る人間なのか，草の心の幻なのかもわかなな〔ママ〕い。どっちにしても，それは草人なのだ。婦人の像がある。［〔欄外に記す〕人が彼女に「今日は」と挨拶する。すると，彼女は通じたのか，通じないのか，唯キョロキョロする。□□□（彼女は〔ママ〕）惑は，彼女は□□□□□□□□□□□□□（全く小心で気が優しいのに）「今日は」が大嫌ひなのだ。何故といふに，それは俗

人の言葉で，そして最も不用意な俗語だからだ。にも拘らず，彼女は全く小心で，気だてが此上なく優しいから，面と向って「今日は」をされると，困りきってキョロキョロする。］彼女のやる瀬なさからか，彼女のほんの気まぐれからか，彼女は鏡に向ってお化粧をする。彼女は兎も角普通ではないから，或は彼女は普通が嫌ひだから，彼女は顔一面に紫を塗る。紅を塗る。黄を塗る。無系統に――例へば，鼻には黄を，目のふちに紫を，口と頬ぺたには紅といふ風にではなく――全く一面に，彼女の独りの好みに従って塗る。そうなのか知ら。彼女は価値を知って，すばらしい宝石――青に輝き紫に光り，黄と紅に燃える底に，濃藍の又漆黒の澱む宝石の鏡を買った。或は彼女の好みから，薄く又厚く凸凹にはられた出来そこなひの鏡――それも亦，彼女に立派な価値である――を買った。彼女は毎日その鏡に向ってせっせとお化粧をする。彼女は普通の鏡の前に，彼女の顔がどんなであるかを顧みない。そうなのか知ら。そんなことは誰にだってわかりようがない。斯くして，熊谷氏の非凡な山が完成する。独りの世界だ。

小出楢重氏。一九百二十二年に，此の人の小さい「人形」が出来た。一九百二十三年が震災で，昨年，此の人のムクムクのジャケットの上に大きな頭を載せた「子供」が出来た。そして今年は，此の人の白布を持つ「裸女」が出来た。一九百二十二年の日記に，自分は〔小出氏が変った〕と書いた。其前の小出氏の作を今思ひ出せない。だがそう書いてあるから，恐らく今のようではなかったのだらう。今年で四年目だ。これで出来上ったのか知らん。少なくとも，山は見えたのか知らん。そうならば自分は，「蔬菜静物」「地球儀ある静物」を好かない。［〔欄外に記す〕――此の人は匂ひの強い人だ。斯ういふ人の活躍が願はしい。］

国枝金三氏。自分は氏の五作のうち，「都会風景」二（天神橋）と，手袋のある静物とをとる。前の三点は，たいしてどうにもなりそうもないし，此の二つはまだまだどうにかなりそうだから。

小林喜一郎氏。わけはどうしてもわからない。別段好きだとは思へない。にも拘らず，此の人の（少女）は，いつも自分の頭の中の何処か隅っこの方に，併し確りともぐりこんで来る。

国松桂渓氏。ドルドーニュの景色は大変ロマンチックだ。それは少し寒いようで，暖かいようで，それは大変気持がいいようで，少し気味悪いようで。そこは静かで人が居ないから，二人で行って静かに話しながら，通り過ぎ度いようで。そこはおはなしのような世界だから，そこへ行って，人が想像でなければ出来ないようなことを何かしてみたいようだ。

古賀春江氏。今年の氏の貼紙細工は，自分には少しうるさく，少しけばけばなったようだ。「花」ならば，〔昨〕作年の方がいい。

ロート氏。染めわけのようなひらたい，ひらたい故に立体的な「裸体」と，仏蘭西美術展覧会の方に来て居る「四部合奏」とを取る。此の種のもので，氏は実に気のきいた，

又美しい色を見せてくれる。自分はロート氏の斯ういふ画（自分ひとりできめて居るのかも知れない。だから唯，或るものといった方がいいかも知れない）が大好きで，他の多くの画（自分が見たのでは，そういふ方がずっと多かった）は好かない。

中村顕郎氏。「眠る若人」は，珍らしい色調の絵だ。さも気持がよさそうで，ちょっと気持のいい絵だ。

里見勝蔵氏。ヴラマンクのような色調の絵がずらりとならんで居る。あまり好かない。小さな「肖像」一点をとる。

曾宮一念氏の三点は，色も調子も弱くて単調だが，静かで気持のいい絵だ。

坂本繁二郎氏。自分は氏の絵をはじめて見る。調子の極めて低い，［〔欄外に記す〕といふより色調の淡い］，けれども亦柔らかい柔らかい――幾分の気味悪さをもった（そこも亦いい）――詩のような絵だ。小さなうつむきかげんの「少女」は，すばらしくいい。それから馬がいい。沢山の風景にもいいのがある。小さな「ノアジー村」など。大きい「老婆」のバックの色が気になる。小さい「老婆」の目の縁の黒はいいが，頬ぺたの蔭が気になる。「家政婦」と「帽子を持てる女」は，「少女」に及ばないがいい。

横井礼市氏。此の人は，勉強するから興味がある。「裸体」デッサンは，昨年の「甲山如意輪観音」を産んだ土台だ。好悪から云ふなら，昨年の「甲山如意輪観音」と「庭」がいい。それからもっと前の，白と黄のなまな色のかどばったの。今年の「室内静物」は，あまりすかない。

安井曽太郎氏も，勉強して来た。が少しばかり静かになったようだ。昨年から裸女の肌の色が気になる。

山下新太郎氏は，相かはらず静かに楽しんで居る。「雪景」の如何に暖かいことよ。湯浅一郎氏も漸く静かだ。

横山潤之助氏が，すっかり落着いたようだ。今迄興味をもって見て来た氏の絵に対して，興味が薄らいでゆくようだ。不幸にして，氏の絵が自分には好きになれない。時々いやらしくさへなる。前からさうだったが，前には興味があった。今年はそれさへなくならうとして居る。

さて，絵の方はこの位ひにして，彫刻にうつる。だが彫刻はたいしたことはない。これだけの彫刻を見まはして，何か云はうとすれば，それはザッキン氏について云ふより外はない。「無題」大理石浮彫に頭のよさがあり，「男の顔」にバーバリックな趣味があり，大理石の「首」に□□□□□□□□□我儘な独断があり，［〔欄外に記す〕「闘牛士」に勝手なガムシャラがある。］そして総じて其の底に，近代的な理智と近代的な敏怪な感覚が敷かれて居る。□□□□□□□□□□此の理智と此の感覚とは，説明せられねばならない。此の理智は，より科学的だとは云へない。何故なら，科学は実在を認識する。即ち，より高いもの，神の創造を認識する。そして其処に，解かれない神秘を分析し，歩一歩を無限の神へと近づくことである。芸術的には対象――外的対象を客観視し説明的に再現する。印象主

義――が前時代の理智的なるものであった。より近代的な人間は斯ういふ。我己を信じないで何を信ずる，と。これは我を神に引揚げようとするのだ。芸術的には，何等かの意味で創造しようとする。其処に我儘があり，独断がある。次に，にっちもさっちも動かないものの前に，感覚が焦燥する。併し人は已に自己を信ずるが故に，創造に際しては我儘な独断を以て，おちついて敏感を統御する。だが又，下敷きになった焦燥する敏感は，ゴーヂァスな創造物の末梢に，びりびりとうごめいて居る。これが近代的なる感覚である。

扨て，頭のよさは又近代的なる特色の一つであり，バーバリックな趣味は，前時代の科学的なるものへの反抗である。ザッキン氏は，明らかに近代人で，そして叙上の各点の間を気儘に往来する。其上氏の趣味は，幾分かたよって居るらしい。――どうも現はれの多くが。自分には氏の感情が，常にあまりに理智的であるのが気にくはない。理智的であるのが気にくはないのではない。非常に，あまりに理智的である氏の作品にいつでも，氏のかたよった趣味を通して，感情が無遠慮にでしゃばるからだ。感情的な要素は，決して反対されるものではない。感情的なるものは，其故により感情的であってほしいのである。処で，氏の作に於て感情がより大きな部分を占領したようなものを，自分は知らない。それならば，自分は氏の作に於て，理智がより多く感情を統御し得たもの，赤石の「母子」が好きである。――今一つことはって置かねばならないのは，氏の中の感情と理智とは，常に或る人々の，それらの如くに和解することが決してなく，常に相傷け合って居るように見えるのである。だから感情の死んだ「母子」が，氏の作中に於ては揚げられるのである。

五日

今日も亦，朝からどんよりとして，空気は少しも動かない。気は重く，何にも出来ない。三時に原瀬が来てくれる。夕方，原瀬と其辺を散歩する。だが道が悪くて，閑かな処は薬程もない。夜になる。話す人も話すこともないから，又机に向ふが，煙草ばかり吸って居る。

六日　日曜日

一日かかってやっと晴れて来る。夜は，遅くかけた月が明るく出る。雨の間にすっかり月が遅くなってしまった。

七日

晴天。道にまだ〳〵暑い。昼前に兄が帰って来る。午後昼寝をして居る間に，文ちゃんが来る。夜，江波兄弟がカンノといふ人をつれて来る。また〳〵ポンチーで十一時になる。

八日

朝から文子を送りながら，目黒にゆく。午後四時，遠山サンを尋ねたが，留守，夕食前，家に帰る。夕食後，兄と新井の方に出る。

九日

昨日からあやしく曇った空が，押へつけるように重い。夜になって終に雨になる。但し夜の十二時には止む。夜，原瀬が来てくれる。

十日

ひよひよと寒いのが心細いようだ。朝から霧のような雨が，そんなかすかな風にのって室の中までしと〳〵とと〔ママ〕湿ったい。それが昼にはひどい雨になり，又ぢきに止んだ。午睡の間に又ひとしきりひどい雨が風にふかれるので，母が雨戸を引いて居るのに気がついた。そのまま，また一しきり眠たので，遅く四時に眼がさめると，あたりがすっかり静かになって居た。机に向ったら，近所で琴の音がする。それが懐かしくて窓を開けると，ずっとはっきり聞えた。女の歌ふ声が高く低くまじった。なかなか達者な琴だ。こんな情けない日に，こんな退屈な時に，程よく遠い，よその琴の音を聞くのが大変に気持がいい。いつまでも聞いて居る。あぶら蝉が急に鳴き出した。夏からは，大分たったと思った頃に蝉の声など聞くのは，懐しいものだ。だが又，すぐに何ともなくなってしまふ。だが又，ともすればこの感傷を何うしたわけだ。空が暗いから。此の答は，いつだって自分には適切であるようだ。にもかかはらず，それだけではないらしい。暗い空は今切れて，かすかなかすかな碧色ののぞくのを見るではないか。あたりがやがやしないからだ。それは例へ常に自分が望む処であるとは云へ，事実として現はれれば立派に又，そんな理由になったとて，不思議ではない。其上何よりもいけないのは，ひよひよと膚寒いのだ。そこで自分は，何うやら遠い冬を感じて，怯えて居るのがはっきりとわかる。

今日は，何をしても何も手につかない日だ。そのくせ，何かものたりない日で，次から次へと何かかにかしたい日だ。ペンで小さな絵を幾つか画いたり，長いものは手がつかないから，古い雑誌を引ずり出して，短かさうな，とりとめのなさそうな軽いものをよって読んだりする。誰彼の小さな旅行記だの，小さな併しものしりな随筆だの，硝子のような象徴派の詩だの，そんなものを読んで，読んでは煙草を吸ひ，又読んではお茶を入れたりして居ると，気分の焦燥と実際の無忍耐とがうまくごまかされて，夜の十一時まで保たれる。

十一日

父の満六年の命日だ。雲がうるさく風が吹いて，何やら嵐めいて居るのが悲しいよう

な日だ。今日も亦，何にも手につかない。それは，一人のあまりに近しかるべき人が不心得な行為を続けて，他の又あまりに近しい人をふみつけふみつけるのを見る悲しさのようだ。空が暗いから！ みんながいらいらして，みんながそれを強ひてかくしだてして居るような鬱陶しさだ。みんなが互に同情して，といふより，自らごまかす為にも，口を開き度いのだが，開けば，しようのない憂鬱がつのりそうだから，敢て黙って笑ふことも出来ないような，そんな気のきかない，だんまり場だ。

昼に兄が帰って来る。午後，弟が鎌倉から帰って来る。夕方，お玉様[32]が来られる。英子サンの処の総勢が来る。そして，みんなで御飯を食べる。八時半に静かになり，一寸外の夜を歩いて来ると（午後の嵐めいた雨風が丁度静まって居た），九時に元気が出る。仕事はうまくゆく。

十二日

風が雲を吹きのけて，自ら労れて影をおとした。とうとう真夏よりも暑い初秋の昼がやって来た。小庭の先の草々が銀のように光り，室の中は蔭なのに，どんな小さな窓からでも，それは沢消硝子を透かせてさへ，刺すような黄色い明るさが撥ね込んで来る。空が高く碧く，体の中に気が燃える。静かであれば益々劇しく，落着いてゐれば愈々たけり立つ。澄んだ汗を瀧のように流しても，日の下を歩き続けたい初秋の昼だ。

江波の弟からの言伝で，中嶌の兄サンが来て居ること，今夕七時の汽車で立つこと，それまでに出来れば逢ひ度いこと，をしらせて来る。四時に家を出て，江波の処を尋ね，七時に江波と三人で東京駅まで見送りにゆく。その足で江波と別れて，帝劇にデニッショウン〔ママ〕一座の踊りを見にゆく。ほんとはもっと早く見るべきだったのだ。だが第一に，新聞で紹介された時に，写真だけ見て馬鹿にしてしまってゐた。これは，広告だなと。だが又それには幾分或は大分，他の理由があった。とても見られそうもない！ そんな気が無理にも，デニッション一座をくだらないものにして了はなければ気がすまなかった。そして，全く其後金がなかった。そして又他に忙しかった。一寸仕事に図に乗ったのだ。或は無理にも忙がしいと思ってゐたのだ。だがとうとう見て了った。併しもう第三回目だった。丁度いいような気もするが，残念な気もする。

自分はいつでも貪り見るから，いつでも眼が足りないのを感ずる。その上，自分は慣れない為か，眼と耳とを等分に使ふことが永く続けられない。その上，全体としてぼかんと見るには，自分の心はあまりに経済的であるか（字義通りの意識は，少しもないのだが），あまりに貪り勝ちである。例によって小さなものは幾分はかなく，大きなものは――これにはもっと云へば，大分云ふことがあるのだが――幾分うるさく気がちる。だが兎も角，簡単な断片を一々について記して置くことにする。

一ノ一，セカンド・アラベスク（デュビッシー曲） 軽らかな，幾分普通なうすもの

をまとった三人の女が，華かではあるが，軽いアラベスクを織り出す。だが自分には，デュビッシーからはもう少し色彩色的なもの――無意味な，と云っていけなければ，いつもいつもの波のような色光でなく――例へば，衣装それ自身に調子の強い色を与へるとか，色光ならばもっと直線的に，或はもっと断片的に与へる□□□□□□□□□□□□（とか云ふ）方が適切であるようなものを感ずる。明るさは，暗さの中にいちめんにちらばう〔ママ〕明るさ。色ならば華やかな底に，何かダークネスを持つような，美しさならば，それがあまりに美しい故に，何やら気味の悪いような，そんな美しさがほしかった。尤も幽かに耳に聞いた今日の音楽からは，あまりそういったものを受け取らなかったから，自分のデュビッシーに対する概念が，幾分かたよって居るのかも知れない。

一ノ二，アダーヂオ・パセティック（ゴダール曲）　曲目の中には，これの演者の名が出て居ない。だが，あとあとのを見るうちに，多分これをやったのが，テッド・ショウンであっただらうと思はれてくる。〔欄外に記す〕［誰か他の人であったとしてもかまはない。次の賞賛は立派にそのまま其人のものである。］これは一つの極致だと思ふ。幕が開くと，中央に楕円形の二尺高位ひな台があり，上手の端に，その上に更に丁度腰かけになるような円筒体がある。そしてそこに，ギリシャの最盛期に作られたと思はれる，最も美しい白い大理石像が腰かけて居る。それは，下手方から静かに這ひ寄るような，柔らかな灰紫の光で慎ましく照らされてゐる。それは，幾分冷たく，而も暖かく――例へば，涼しい月光の下の優しい心のように，美しく潤ってゐる。それが静かな音楽につれて，全く中間の無駄なく，美しいポーズからポーズへと動いて，最後に仰向に首と片腕とを台の縁から垂れて，音もない終りとなる。それは全く，フィギュアを透して全き抽象にまで昇ってゐる。だから，そこにあらゆる悲しさが，最もしめやかな悲しさとして現はされ，あらゆる喜びが最もひそかな喜びとして含まれる。動きが動かないものにまで到達しようとして居る。そこに永遠への黙示がある。
〔欄外に記す〕
［ミス・ダグラス，ミス・シャーマン，ミス・ディー］

一ノ三，ヴァルス・カプリス（シャミナード曲）　カプリスよりも，より高いものの影にか，或はより快適でなかった為か，デリカシー，思ひきったデリカシーだけが漂った。――（多分後の為で）
〔欄外に記す〕
［（ミス・ドリス・ハンフレー）（ミス・ディ，ミスター・ワイドマン）（ダグラス・グレーム）］

一ノ四，アルバム・リーフとプレリュード（スクリアビン曲）

一ノ五，ヴァルス作品十四番（ショパン曲）　うすものの衣裳に同じうすものの広い布を以て，綺麗に華やかに舞ふ。或は明るい黄の中に輝き，或は緋の中に熱情的に燃え廻る。けれども亦，自分は先にも書いたように，どれにもこれにも此の光を投げることには，どうしても賛成出来ない。

一ノ六，ワルツ作品三十三番第十五（ブラームス曲）及ビ愛の夢（リスト曲）　只一色水色の月光のような光の中に演じられたこの二つの舞は，極めて美しいものだった。

初めのワルツでは，デニスは極度に柔らかい，手の指の先から足の指の先まで，なよなよと柔らかい動きを見せた。それは，波のようなアッシリアの薄肉レリーフを思はせる。只アッシリアのそれが，自分には写真板の影響のもとにか，いつも淡いセピアに結びついて居るのに対して，ここでは暖かさを思はせるよりは，寧ろ清らかさを思はせる水色の中に終始する。あまりに柔らかに過ぎると自分が思ったら，六本の手を自在に操って踊って居る印度の彫像が自分の前にあった。印度のまるまるとした，そしてにょきにょきと肩から出ばって居る腕と，同じく厚くて円い胸から腹と，又腰と脚とは，デニスのそれらとは，全くと云はれる程異った感じではあるのだが。恐らくは，それがあまりに柔らかく，あまりに自在に動いたからだらう。だが又此処には，又もっと必然的な関聯があったのだらう。何故なら，デニスは実に出発から到達まで，より多く，殆ど全く東方的であり，印度は更に彼女の研究する所だったからである。それは強烈ではなくて，優雅な併し極めて華やかなものだった。それに対して，後の愛の夢はぐっと静かなものである。前のものが，「技術の為の技術」的であると云へるならば，後のものは，より情緒的であると云へる。前のものが，或る種の pomposity をめざす為に pompously に舞はれたと見ることが出来るならば，後のものはより内面的だと云へる。そしてそこに，舞台の上にはっきりと或る表情が漂った。

〔欄外に記す〕
［ルウス・セント・デニス］

一ノ七，春の声（シュトラウス曲）　これは，デニスがボッチチェリの「プリマベラ」からヒントを得て創造したと解説される。それならば，この華やさの底に，底に徹するような哀傷がほしかった。それでなければ，自分はこれを非常に高くは評価し難い。これは，只美しかった。最後に，絵から浮んだような最初のポーズにかへった時，ふと何やら感傷的なも〔の脱カ〕を感じはしたが。そして其の為にか，これはイタリアのルネッサンスよりも，何やらフランスのルイ朝を思はせるようなものがあった。それはどちらかと云へば，黄ばんだ明るさが勝った。自分はこれに銀鼠のほのかな霞をかけたい。

二，暁の羽毛（プェブロー牧歌）　テッド・ショウンの鷲の踊りは，キビキビして力があった。酋長の娘コーデー（デイ）は，可愛らしかった。狼の踊は，面白かった。婚礼に集ふカトシナスの集りは，思ひきって珍らしかった。凡ての文明人に極めて興味深いものでなければならない。

三ノ一，孔雀物語（ロス曲）　可憐な小品だ。思出の中の説明的な亢奮，化粧，凱歌，死よりも何よりも，悲しい孔雀のそぞろな歩みがよかった。それは実にこまやかな孔雀の観察だ。だが，孔雀が叙実に描かれた事に高いものを見るのではない。孔雀の中から，此の可憐な物語に全くふさわしいもののみを，そしてそれらの恐らく総てを，極めて用心深くピックアップして，そしてそれを極めて適切に表現した処に価値がある。それは，ムードにまで高く昇って居る。此処まで来れば，自分には可憐なこの物語りも何もいらない。一羽の悲しい孔雀が居て，そぞろにそこを歩む。それで立派に出来上って居

る。それは，既に一つのムードであるから，物語りもいらなければ，孔雀に就いての何等の概念もいらない。ここまで来ると，物語は既に過去の道程であるより外，何でもない。そして，ここまで来ると，今度は反対に物語が却ってこのムードを，或る種の意味の中に限定しようとするのに対して，かすかな不満をさへ感じてくる。ここまで来ると，表題もいらない。適切な音楽を（その又音楽の表題が何であらうとかまはない）選んで，此の姿で此の通りに踊って少しも差支へない。

ここに次ぎの反対論が当然出て来る。即ち「それ以上に全く抽象的であるディヴィジュアライゼーションが立派にある」と。それは，立派にある。少なくとも，立派にあり得る筈である。だが又それも亦相当に，或はより屡々危険をともなふことも事実である。ディヴィジュアライゼーションが全くフリーに，立派に独創的に衷より創造せらるれば，それは完全であるべきだが，そこに少しでも約束が出来，そこにマンネリズムが生れるならば，最も自由であるべきディヴィジュアライゼーションも亦，立派に概念化されてしまひ，形式的な符合にすぎなくなってしまふであらう。無限であるべき抽象的なディヴィジュアライゼーションがややともすれば，形式的に限定せられてゆく間に，例へば此の孔雀のような道程を辿って仕上られてゆくムードには，反対に無限な現はれが開けるであらう。

〔欄外に記す〕
［（デニス）］

三ノ二，　グノッシーヌ（サタイ曲）　これは又実に愉快なものだ。ポーズが愉快だ。東方的な又原始的な，少しばかりグロテスクな（これが効果を齎して居ることは，勿論だ）ポーズからポーズへの動きも又極めて断続的で，それが又極めて愉快なくすぐるようなヒューモラス，ヒューモアを渲ませる。斯うした無邪気な嬉しさは，われわれにハタキをかけてくれる。斯うしたものが，又特に細心な研究と細心な撰択とを要することは勿論であり，そして又，適宜にそのようにされて居ることがうなづかれる。

〔欄外に記す〕
［（テッド・ショウン）］

三ノ三，アプサラセスの踊りはどうしたのか，オミットされる。

三ノ四，東方印度人ノーチ（カドマン曲）　これから自分は解説されるような〔複〕復雑した意味を受けとることが出来なかった。それは，幾分劇し過ぎて，幾分放散的だ。自分には東洋人の，東洋人の間に異常に発達した官能の世界はもっと静かな，繙かまるような蠢くようなも〔ママ〕底に沈潜した〔ママ〕官覚からのみ理解され，表現せらるるもののように思はれる。勿論解説されるようなもののみをそこに求めることは，つまらないことだ。だが又ここには，それ以外の他の高い現はれも亦別段なかったようである。

四，クワドロ・フラメンコ（西班牙のジプシー・ダンス）　これは，量的に豊かだから，見て居るうちは見ごたへがあるが，又つかみどころもない，幾分散漫なものだ。中で，真赤な着物のすそをとって，真白な重ねの下に美しい黒絹の靴下を見せて踊った，第一のクワドロ・フラメンコの舞が一番よかった。第二のクワドロ・フラメンコの舞もその

次によかった。自分の中にスペインのジプシーを特殊づけて居るのは，カルメンだ。そして，断片的に紹介されてゐるアンダルシアの女の最も普遍的ないくつかの特質に見ても，そこにはたいした間違ひはないようだ。この舞踊団としては，それらはたいした重大なものでないかも知れない。而もそれならば，尚思ひきって，そんな特殊なものにかかづらってくれてもよかったと思ふ。自分は，赤と黒との着物と，幾分あさぐろい，又白い顔に黒い目と，大きい紅い唇とがほしい。そして，激越な空気と悲哀とがほしい。その意味では，過日見た□□□□□□□□（コカとミシュラの）若いシッポフ兄妹のジプシーは――これをここで比べるのは乱暴だが――それは，スペインのジプシーではなく，ロシアか，或は恐らくはポーランドのジプシーだが――激越と，底の底の悄愴とで，小さな舞台と小さなオーディトリウムを息苦しくした。

十三日　日曜日

快晴。暑い。晩，築地の芝居を見にゆく。ハーゼンクレーフェルの人間[33]だ。此の芝居は問題だ。七月のはじめに読んだ時から問題だ。今も。上演せられるのを見ても，まだなほ同じ問題だ。だがこれについては，長々しく而もまだ〳〵断片的になりさうだから，云はないで置く。演出に就いては，全くうまく行って居ると思ふ。只「朝から夜中まで」でも問題とした，暗黒のポーズの騒々しさが，今度は進行的な勢ではなくて，観念の持続［〔欄外に記す〕とその自然な推移とを］を〔ママ〕妨げて居る。暗転の度数の更に多いことと，一場が更に短いこととが，その結果を益々大きくして居る。今度の場合は，暗黒の長さは多少長くなりすぎても少しもかまはないが，その間の静かであることは，益々のぞましい。前の場合には，反対に多少騒々しくても，時間的に短かければ短いだけ効果を上げ得たのだが。［〔欄外に記す〕厳密に云へば，此の演出の失敗は致命的であるかも知れない。］

十四日

午後，昼寝をしようと横になった所へ，原瀬が来る。一時間半程も話して，二人で三科[34]の展覧会を見にゆく。ブリキ細工がある。丸たん棒がある。サルマタとあかだらけの着物が首をつって居る。駄菓子やの袋があり，熾烈な色の染めわけのハコがあり，伝統のように手ぶくろと靴と髪の毛があり，金網に血がしたたり，木の骨が花嫁の役割を演じ，硝子ビンの中に金属性の奇怪なヴィナスが窒息し。勤倹貯蓄の旗がゴールデン・バットを宣伝し，上等セビロ服を軽侮する。六尺のカンバスに乾坤が圧縮せられ，近代的都市組織のはらわたが裂かれ，大小円〔楕円カ〕楕十の鑵がこっちをむいて無用の長物を示し，無邪気な小供達に送られて千代さんが死に，淫売婦と貴婦人が提携し，五千年前と五千年後の穴居建築の為に親切な壁面が考案され，見えすいてる構成が見えすき，矛盾せる社会の果敢なき人生が嘆息を以て歌はれ，親切な閑人は市電車乗換切符の考案に余念がない。食糧問題解決が音響的に考察され，新らしい白と黄の競技場が発明される騒々し

さの中に，薔薇を愛する少女は，hとtを主題とせるモノグラムを送られ，ニヒリストの美しき恋人は二様にまで追究せられ，タンネンな花輪の中に，春に於ける恋人が憧憬されるのである。この中に更に，惜しいような立体派風の画の傑作，美しい版画が何枚か驚いてゐるのである。これを見て怒る人々よ，諸君はまちがって居る。これは，ヒマのない人々がヒマを作り，ヒマのある人々がヒマを利用して真面目に考へ出したものなのである。これを見て笑ふ人よ，君は今一歩個人義主〔ママ〕に徹底したまへ。これを見て悲しむ人よ，君は世の中をかいかぶって居る。これを見て苦しむ人よ，これが人生のすべてではない。これを見て理解したといふ人よ，たわけの骨頂だ。これを見て解らないといふ人よ，お前は馬鹿だ。

原瀬と藪そばへ行き，別れて自分は江波の処にゆく。十一時帰宅，一時就寝。

十五日

快く晴れて暑い。長い日を終日家に居る。昨日今日，春先のような風が吹き荒れる。

十六日

日は明る強〔ママ〕ぎる程照りつける。然し，何やら物足りないような淋しさのある日だ。風は嵐のように荒れて荒れまはって，空気はからっと乾いて居る。然し，最後の暑さが一度に圧縮されて，動きのとれないような蒸々する日だ。空は青く高いけれども，雲が濃くなったり薄らいだり，何やら安心することが出来ないような，あたりは静けさといふより，寂しさを思はせるようなものばかりだのに，ひどく騒々しく取り乱して居る。自分は風邪を引いたのだらう。頭が重く，煙草が痛く，気根がない。早く九時に床に入る。

十七日

雲が重く風がぱったり止んだ朝から，暫く日が照ったが，反対に北風が吹きだした頃から，あたりは真暗になって，三時にはとう〳〵雨が降り出した。ひよひよと桐の葉に吹きつけたと思ふと，今度は大粒な，まばらな雫が白く土にしみたりした。写生仕度をして雨に降られて，原瀬が来る。夜に入っても雨はあはれっぽく降り，秋も終りのように膚寒い。

十八日

細かい雨が降って居る。かまはないから，朝十時二十分の汽車で鎌倉に来る。省線電車に乗って新宿まで出ると，雨が止んで明るい日が照る。傘とレインコートが邪魔になる。だが品川で汽車に乗った頃から，あたりは又まっくらになる。自分は偶然昨日から読みさした，有嶋武郎氏の「旅する心」を持って読み続けたからか，此の慣れきった小さな汽車沿線の景色を眺めてみたりした。秋は思ふ存分暗かった。田圃の稲の穂の波う

った姿は，終りが近づいたといふ感じだった。田圃の中にやたらと立てられた仁丹の，石鹸の，福助足袋の……それらの野暮臭い広告板は，さも旅らしい旅でもして居るかのように眺められた。六郷川の河水と草におほはれた河原と鉄橋とは，阪神電車の沿線を思はせた。程ヶ谷〔保土ヶ谷〕を出ると，又雨になった。

窓から見下す道に，泥水が撥ねた。それを見ると，いやな気になった。これは全く伊太利の景色とは異って居た。感激がない。感傷がない。哀愁がない。懐郷がない。どうも自分は旅の子ではないと感ずるより仕方がない。鎌倉に来てからも，雨は止まない。夕方になって，まっくらななりに雨が上ったので，妙本寺の境内を歩いてみる。そこにもなんにもない。

十九日

東京に電報を打って置いたので，午後，久顕が来た。夕食前に，譲二叔父様も見えた。朝から艦に行かれた昌生叔父様[35]も，夕方には帰られた。賑やかな晩食の後，二時までも起きてゐる。

二十日　日曜日

昨日から，晴れたらめっきり秋らしくなった。朝縁側に立つと，足がつめたかった。目の下の町，黒くなった樹々と樹々の間に俯せた屋根と，稲村ヶ崎の禿げたふところと，それから海へ，水平線から空へと霞が濃くなってゆく。十時十四分の汽車で自分だけ東京に帰ってくる。新橋で下車して銀座で簡単な食事をとって，築地のマチネーを見にゆく。

カイザーの「クラウディウス」とゲーリングの「海戦」。「クラウディウス」。斯ういふ一寸した小品では，何でもかまはない，ねらったものが一つ，強く響き出されればいいのだと思ふ。即ち自分には「わしは動物だった――お前は人間だ――」が，別段の興味でも価値でもないのだ。それならば，今日の演出に対しては，もっと力であっていい，もっと叙実な力であっていいと思ふ。それはそういふ風だった。だがクラウディウスはもっと獣であり，もっと実際的な力であり得たと思ふ。そして，若き妻には何やらロマンチックなものが濃かったが，自分としては，これは過信からノンセンスにまでいっていいと思ふ。

「海戦」は懐かしいものだった。

二十一日

朝早く，百舌鳥の鳴くのを聞いた。体が震へるように思ったが，日向が懐しくて，縁側に長いこと出てゐる。

夕方，原瀬と宮田がカンバスをさげてやってくる。宮田を上原サンに案内しながら，

三四十分外を歩いて帰って食事をすませると，江波が来た。珍らしい三角をつれて来た。三角とは震災後一度も逢はなかったが，何のお互に少しでも変りはしない。

倉沢量世様

いつぞや葉書を頂いてから，ひびのいった君の気持を更にもゆすったりしない為にも，十月まで御無沙汰しようと思った。だが早く秋になった。今朝はじめて百舌鳥が，あのいらいらする，けれども懐かしい声を鳴くのを聞いた。東京といっても，僕の所の辺は，此頃では真昼でも蟲の小啼きが絶えない。静かで，どっちかといへば退屈だ。……退屈どころではなかった。今，買ったばかりのインクの大ビンを，すっかり床にぶちまいてしまって，一さわぎして了った。だが又，そんな事が大騒動である程に，静かで退屈なのかも知れない。

ところで，そんな静けさを一寸説明する為に，一とわたり小さな庭を見わたそうと思ふのだが，今は夜中の十二時前だ。だが，見わたすまでもない。毎日見てゐる小さな庭だ。台湾から遅く帰って，遅蒔きながら，素人園芸をはじめた。十日ばかり前にトマトがやっと食へるようになった。トマトは一本しかないが，今十ばかり実がなってゐる。そのうち五つ位ひ赤らんでゐる。だが又，此の実を見るのは毎日のことだが，情けない程楽しみだ。茄子は三本植ゑたが，一本は実がならないうちに枯れた。あとの二本で，それでも三つか四つ位ひ実がついて腹の中に入った。それからコスモス。これは一間程にもひろ〳〵伸びたが，まだ蕾もない。黄色い又赤い葉鶏頭が，やっとこのごろになって小さいなりに美しく燃えはじめた。それからサルビヤが，これも此頃になって五六本花を出した。残りの小さい奴らは，今年中かかっても花咲きそうにない。

一番可愛がってやるのは，アスパラガスの青い葉だが，こいつが冬枯れしなければありがたい，と思って居る。孔雀草とマガレットは既に花咲いて，もう枯れるばかり。それから，小さな萩が，これもやっと今少しばかり蕾んで来たばかり。だが又，何もかも斯う遅くてひぼひぼしてゐると，一層素人らしくていい。菊はまだ海のものとも山のものともつかないが，小菊よりも大きいのが，今のところいいらしい。

朝顔はやさしい花だから，夏中いくらでも咲いた。茄子が二つか三つしかならないと，百性〔ママ〕が可哀そうになる。菊の蟲をたんねんにとってゐると，お爺さんの楽しい心になる。何か小さな花が一つ咲くと，誰かに見せてやりたい。えぞ菊は，咲いたと思ったら枯れてゐた。あんなにあっけない花もないと思ふ。紫苑は黙って大きくなって，黙ってぢみな花に咲き出た。めだたないが，すなほな花だ。隣りの薄が地面伝ひに入って来てのびた。今年は十五夜が遅いから，それまでには白い穂が出るかも知れない。十五夜と云へば，今日の新月は鋭くて，寒かった。こほろぎが盛に鳴く。そんなに中野の秋の夜が静かだ。

さて，台湾土産にも大分カビが生えた。君の奈良の印象にも，そろ〳〵カビが生えやしないか。だが又本当におちつくのは，カビが生えて，カビが生えて，それからのこと

だと思ってゐる。それならば，刺戟よ後から後からやって来い。さてカビよ，後から後から生えるがいい。東京に帰って来たら，遊びに来ませんか。いやに鼻水が出やがる。風邪を引かなければいいが。

　　膚を寒み小用しきりにもようして
　　めさめにけりな今朝秋の朝

久功。

二十二日

あと十分で三時だ。神の鐘が十二時から幽かに幽かにひびいて，それが段々に高く鳴って，それが愈々劇しくなって，自分をぶちのめす，ぶちのめす。何といふやくざな野郎だ。おっちょこちょいだ。お前はお前のもくろみが整然として居れば整然として居るだけ，そんな時に無性に信心深くなったりする。お前は時を信ずる。これはとんでもない間違ひだ。お前はお互を信ずる。これはとんでもない卑怯だ。お前は必然を信ずる。何といふお人よしだ。お前は偶然をさへ信ずる。まるで問題のそとだ。総て信じてはならない。只一つお前が自信を以て信ずる時にだけ，お前自身を信じていい時がある。だがそんな時はお前の一生涯のうちにさへ，数へる程しかないものだ。だからお前は信じてはならない。それは，悪魔の巧か，それほどの悪いものでないにしたところで，お互の衷にある根深い，或は運命的な憎しみなのだ。では憎しみは，今少し可愛がってやるがいい。いぢめつけた処で何うにもならなだ〔ママ〕から。喜びは有頂天にならずに，用心深く享楽するのだ。約束は今少し大概にして置き，総て相関連するところへは深くなく，交渉はなるべく避けるのだ。積極的な共同などに到っては，夢さへも見ないがいい。そこで天と神とは，夜お前の懐に入ってお前の心臓をむしりとってくれるだらう。お前が痛みにあへぐなら，お前が無残に戦くなら，お前が悲しみに死ぬなら，それこそは神の恵なのだ。

敦ちゃんに逢った。何年ぶりだったらう。満六年になると思ふ。立派な美しい奥さんになって。

デニッショウンの踊だけ見ようと思って遅く帝劇に行ったら，大変な人垣が長々と続いて居た。そんな窮屈さを――それでも人並〔ママ〕に暫らく中に入って居たが――堪えられなく，とった席を捨てて列の外に出て，ゆっくりした気持になって，人々の雑踏の後から，最後に一人ゆっくり階段を上って三階に出たら，敦ちゃんが居た。敦ちゃんは自分の知らない奥さんと話しをして居た。敦ちゃんも直ぐに自分に気がついたらしかった。だが人は唐突に面して，極めて落ついて，全く落着いて，まるで意志のない行為を取るものである。自分は落着いて黙っておぢぎをした。敦ちゃんも亦落着いて，もっと丁寧に挨拶を返した。自分はそのままふりむきもしないで，前を通って廊下を向側にまはって，絵葉書屋の前に立った。これが自分のあまりにも復〔複〕雑な感情の，あまりにあっけない，

併し仕方もない現はれだったのだ。

けれども敦ちゃんは，直ぐ自分の後に続いたと見えて，自分から三足とは離れないで，例の奥さんと列んで立って居た。自分は自分の横顔に敦ちゃんの目を感じて居る。それは秒を追うて重たく感じられて来る。けれども自分は又どうしても快活になれなかった。自分は併し，とう〳〵敦ちゃんの方をまともに向いた。だが又今度は，敦ちゃんの方で逃げてしまった。目だけをそらせて。自分は又々憶〔臆〕病になって了って，そこにある絵葉書をよくも見ないで二枚とった。又々自分の横顔に敦ちゃんの目を重く感じて居る。金を払って二度目に敦ちゃんの方に，今度は身ごと向いた時，敦ちゃんは遅くも早くもなく，逃げてしまった。今度は足をかへして歩きだした。静かに，まるで静かに，例の奥さんと列んで。敦ちゃんは階段の上で暫らく止まったが，ふりむきはしなかった。やがて静かに階段を降りて行って，去ってしまった。

踊りは色々な理由で（又恐らくは実際にも），前のようによくなかったと簡単に言って置く。

Program No. 5（21st—25th. Sept.）
This program will be composed of the most popular numbers selected from the four previous programs.

（二十六日の処に一寸書いて置く）

春べ春野に　　土筆をつめば
夢にも似るか　　十年前。

十年昔に　　別れた人は
今はよそびと　　人の母。

人妻恋ふる　　若者が
しのぶ昔は　　むかしにて。

艦見にゆくと　　波止場に立てば
空に流れた　　黒煙。

月のてるてる　　波の上に
飛んだはかもめ　　ないたもかもめ。

をとめ鴎が　　波間に映す
赤いくちもと　　懐しく。

十年の昼を　　十年の夜を
日かけ夜をかけ　　思うて止まず。

そっと泣いても　　見るなれど
今日見たかもめ　　明日見るかもめ。

泣くと見せては　　笑ってばかり
いつかないた鴎　　いまいまどーこ。

春べ春野の　　小鳥の歌に
忘れた夢の　　忘られず。

十年昔に　　別れた人は
今はよそびと　　人の母。

人妻恋ふる　　若者が
しのぶ昔は　　むかしにて。

この混沌たる小唄は，一九二二年二月に書いたのだが，その時自分は，敦ちゃんと最後に会った――一緒に直矢叔父様を尋ねて横須賀に軍艦を見に行った時のことを，ひそかに心に思って居たことを思ひあたる。

其後直ぐにまたもう一度会ふ筈だったのが，会はないでしまったことが，最後の手紙でわかる。

……ほんとにごめん遊ばせ。そんなにまで御二人が御心切に待ってゐて下さいますとは，すこしも考へませんでした。直矢さんにもお詫びをしなければなりませんね……此のダーモンドの絵は，今画きましたの。下手でございますから，お笑ひになってはいやでございますよ。唯一寸いたづらにしたのでございますから……どうかおよろしかったら何か画いて下さいませんか。前にいただきました絵は，ちゃんとだいじに始末〔ママ〕て御座います……

二十三日

空が重くて。それは時々薄い日がさしたけれど，雲が低くて，雨がもたれてもたれて，今にも降り出しさうで降らないから，空気が動かないで，土の息，草の息がむうむうとにほって，蒸しかへして暑い。十時半に小城サンに行って，四時過ぎに帰ってくる。

二十四日

空が低くて，雲が重くて，空気が板のように動かない。それは，蔭鬱といふよりも，寂寥だ。ほのかな望みもない。日暮前，三時間の静けさといったら，それは静けさといふより，空っぽだ。かすかな香りもない。だから自分は怒ることも，立衝くことも出来ないでしぼんでしまふ。

✓檜葉垣の向ふに見ゆる隣家（となりや）の栗のいがわれて実が見えて居り
✓縁に立てば隣りの栗のいがわれてこっち向いて居り実が見えて居り

夜になって，雨がぱらぱら降って来る。風がざわめいて寒くなる。無性に酒が吹（飲カ）み度くて街に出たが，ウィスキーがないのでビールを飲んだら，猶のこと寒かったが，ほんの少し飲んだら，物足らなさが薄らいだ。雨は降ったと思ふと止んで居る。

二十五日

終日雨が降って，寒くてつまらない。

二十六日

天気になる。但，夕方前，驟雨あり。午後，も一度と思って院展を見にゆく。

一日のうち，暑いと思ふと寒い。それが自分を非常に不安にする。又億劫にする。此頃自分に，少しもユーモアがなくなって了ったことに気がつく。

二度目に見たデニッショウン一座について，簡単に書いて置く。此の第五回目のプログラムは，前四回のうちからポプュラリティの大きなものを撰んで作られた。即ち観客のうちの八分は常に他の二分よりも劣って居るから，芸術的には一段低いものが選ばれたような形になるのが当然だ。「布哇火山の女神ペレーの踊」など，なるほどあれだけの布を扱ひこなすには，技巧の熟練を要する。けれども又，エフェクトから云ふなら，何のことはない。其の上，例によって例の光だ。「高翔」（シュマン曲）に到っては，トリック以上でない。「クラップ・シュッター」，「テキサスのホールを廻りて」，「グリンゴタンゴ」なども，当然第二義的なものである。斯ういふものの中に入ると，「東方印度人ノーチ」が，前よりもずっといい。「革命的エテュード」（ショパン）は，今少し抽象的であり，気分であってほしかった。にもかかはらず，今日のうちではいい方に入れてもいい。「エジプシャンバレー」四種は物足りない。「ソーチル」はよかったと思ふ。皿を持った宮廷の踊子等の踊りなど，何ともないものではあるがよかった。ショウンとグレーエムの踊もよかった。「孔雀物語」がいい。踊りが総べてあれであっていいのではないけれども。

院展の彫刻を見て，一番しみったれた感じを持たされるのは，タッチだ。牧雅雄氏の「M 氏」，清水多嘉示氏の「裸体」，喜多武四郎氏の「父の像」「坐像」，木村五郎氏の「脚を伸した少女」，松原松造氏の「顔」等。仏蘭西美術を見ても感ずる如く，テクニークが美術の一つの目的となったとさへ見へる今日，斯うした傾向が強いのは，当然ではある。けれどもそれがなかったら，たいした何でもないようなものでは情ないと思ふ。中嶋誠淳氏の「葡萄と少女」の如き構図的な装飾的なものにあっては，タッチがより必然的な置位を持って来ることは，容易に考へられる。けれども写実的場合ならば，若い人々がそんな処で安くおさまってしまふのは惜しい気がする。此の中に御ン大，佐藤朝山氏の諸作がグット本質的なものをねらって，少しもうまげがないのに，底光りがして居るのは肉皮〔ママ〕である。

それから気がついたのは，此の中に二人の女の人の作が，二人とも極めて簡単な考へで仕事をして居ると思はれることだ。男の人でも，数多い中でそんな風に見える人もあるが，概してもっとずっと考へ方が深いことはあらそはれないと思ふ。此の中で興味をかけるのは（未来に）西川為善氏だ。氏の「座せる女」は全く未製品であり，其上幾分の衒気さへ見える。だが何故か自分は此人の仕事に興味を覚える。此の中で，これは困ると思ふのは，松原正業氏の「朝の化粧」だ。これは全く困る。

二十七日　日曜日

すばらしい秋晴れだ。皆がそれぞれ出てゆくので，そうではないけれども，自分も明

るい日に誘はれて，午後出かけた。高円寺に出て吉祥寺まで電車に乗って，若しかしたら国分寺辺まで出かれ〔け〕るか。など考へて一人でぶら〳〵行ったら，高円寺の手前で原瀬に逢ってしまった。つまり，原瀬のうちまで途中をまがりくねり歩いて，途中には薄の美しい藪があった。そこここのテニス・コートにポンポンと閑かに毬がはじけかへった。日が馬鹿に明るくてまぶしかった。ヂット背中が熱いのが気持よかった。福寿院[36]といふささやかなお寺の蔭になった茶の木の垣に，白い花が咲いて居た。そして，原瀬のうちに行った。宮田が来て居た。四時に家に帰って来た。譲二叔父様が英昌をつれて来て居られた。留守に三沢が来てくれて，帰ったあとだった。暮れる頃から，譲二叔父様達と有楽町に出て更科を御馳走になって，銀座を歩いて疲れて十時に家に帰って来る。

二十八日

忽ち曇って，ひよひよといやな風が吹きやがる。降りさうで降りさうで降らないのが有難いが，癪にもさわる。何にもする気がない。今日から英子サンの処に晩だけ寝に行くことになる。

夜，築地小劇場に心座[37]の第一回公演を見にゆく。遅く出かけたので，第一の「洞」は見ない。

寛公！

何だって君はしぶとくも俺の留守ばかりねらって来るんだ。それとも，君は実に運の悪い男だ。まるで蓑蟲か何ぞのように，めったに自分の巣をあけない俺の所へ，君が偶然来る時は実に暗号のように，俺の例外の時なのだ。例へば昨日などは，俺は朝から退屈して退屈して，何度ママに相談したかわからないのだ。或は嘆願さへしたのだ。ねえママ，僕は何処かに出てみたいのです。僕は何処へか行く所がないでせうか。何処でもいい，僕の行くところを教へて下さい，とね。それでもまだ行く処がなかったので，あてどなくぶらっと出たのだった。といはうか。

それとも，昨日はわざ〳〵来てくれたそうだね。あひにく留守にして……それが又いつでもだものだから，尚更恐れ入って居るのだ。ほんとに失敬した。許してくれ。そして，又来てくれ。といはうか。

さて，仕事は無事終了してほっとしたことと思ふ。全く俺から思ふと，とんでもないどえらい，併し堪えられない仕事だからな。だが帝展の蓋が

二十九日

〔欄外に記す〕

［あくまでは］　ここから二十九日記す。昼飯前に江波が珍らしくひょっこりやって来た。俺に大阪に一緒に行かうって云ふんだろ，勿論俺は断ったさ。そんなに働らいたら，俺は死んでしまふってね。だが俺は昨夜，面白い芝居を見たよ。極めて簡単なセットに，

三人の男と一人の女が出たり入ったりしたのだ。男のうちの二人は，揃って鉄色無地の羽織を着てゐる。その下は着流し一本差し，と云へば，頭の上には当然チョンマゲがのってる。そして，素足にセッタさ。今一人の男は白髪の小ちゃなチョンマゲに袴に柿色の羽織なんだが，これは何うでもいい。只一人の女はといふと，スカートの広がった十八世紀頃の洋服，その又洋服が銀鼠の如何にもどっしりした奴で，髪の毛は字義通りの金髪なのだ。そこで，若い男の一人が，斯ういふ。

貴様は俺の敵だ！

すると今一人の若い男が叫ぶ

貴様は俺の敵だ！

それから，斯うだ。

（ユアン）俺の敵が俺と一緒にテーブルについて居るのだ！

（ヨルゲ）俺の敵がお前と一緒に俺の前に立って居るのだ！

ユアンとヨルゲといふのが，其等二人の男の名だ。それから，

（ユアン）葡萄酒――ユアナ

（ヨルゲ）葡萄酒――ユアナ

ユアナといふのが，金髪の女の名だ。そこで，ユアナが斯う云ふ。

恋愛なんて――大切なものではないわ。あなた方は友達なのです。友情――あなた方の――男同士の――それは極，稀なものだ

其時女は既にユアンとヨルゲとだけが知って居た筈の――そして，彼女自身も実は密かに知って居たところの，毒の入った葡萄酒を飲み乾して居た。

どうだ。これは恐ろしくロマンチックではないか。だが又，カイザーのロマンスは甘ったるくない。それは，ギシギシして居て重たい。例へば，クラウディウスは斯う話す。

濃い闇に紛れて，そいつの門前に馬を走らすのだ。そして剣の柄で家中に轟き渡るほど叩くのだ。誰もわしを見て居るものはない。内からは訊ねる。

外に居るのは誰だと。騎士だと答へる。名は何だと訊く。名は無いと答へる。何の用かと訊く。決闘の為だと云ふ。理由はと訊く。女の為だと答へる。そこでそいつは出てくる。――其の場合になって，どの女の為と訊く要はないのだ。それから二人は刀を交へ――わしが勝つ。

どうだ。これは恐ろしく本質的ではないか。

だが，今日は寒いぢゃないか。煙りのように雨が降るぢゃないか。葉鶏頭が黄色いよ。サルビヤが赤いよ。空が重たくて――俺は又々退屈で，此の手紙を書くだろ。ところが君には何のことだかわからない。にも拘らず，それは少しでも俺に係りはないのだからな。

ぢや，失敬。朝から遊びに来てくれ。ゆっくりとだ。

高円寺坊頓首

朝のうちは，おまじないのような雨が降った。昼からは夢のような雨が降った。夜になって，だらしのない，しまりのない雨が降った。終日寒くていけない。夜はたった一匹のこほろぎが近くの縁の下で，それは全く休みなく鳴き立てて止まない。

ユアナの演出が風変りだから一寸。演出者は村山知義氏，訳も又舞台も。舞台は，村山氏の云ふ如く，「日本で所謂構成派式とかいふ奴である」，それは，簡単で入要なだけのものを以て，丁度「ユアナ」のセリフのように，幾分の破綻のある，左右対称を基本としたようなもの。そこで，ユアンとヨルゲとは，「二人とも着流し一本差し，素足にせった，お揃ひに鉄色無地の羽織を着て」出てくる。ユアナは「スカートの広がった十八世紀あたりの洋服，色は銀鼠，髪は金髪で」，「左右に二本づつの捲毛を垂らしたかつら」である。老僕は「白髪のちょんまげ，袴に柿色の羽織」である。そこで前半は「暴風を予感せしめるスローモーション」で始められ，「鳥の声を現はす為に」セロとヴァイオリンが鳴る。「ギゴチないオドリのような，しかも適度な動作」で「光線を弄ぶことは避け」られる。

扨て，カイゼルが斯くも脱線したのは，日本に於ての此の演出が恐らくはじめてであらう。だが少しもそれは，悲しまれる理由はないのだ。村山氏は云ふ。「そこで私は恐らくカイゼルの真意であらう処の，此の脂のじとじとと垂れるような演出を見切って飛躍をやったのである。」 これはまさしく飛躍だったのである。これが村山氏の，観者にかけた「わな」だったのである。役者は又――長い訓練を要したであろう――此の馬鹿げた演出を，殆ど全く純な真面目さを以て，全く立派にやりおほせた。それが観客をして殆ど襟を正して，此の馬鹿げた芝居を見させるのである。即ち観客をして，自ら進んでその「わな」に飛びこませるように出来て居るのである。此の気まぐれが，村山氏のナイヒリスチックな土台の上に建てられた空中建築の中に，殆ど生きて居るように活躍する。

さて此の衣裳，化粧は二つの理由によって価値づけられる。一つには，自由を主張したこと，一つには，われ〳〵現代日本人の持つ概念を意地悪く利用して，矛盾乃至錯誤の観念から――理智的否定，感情的グロテスク――印象の稀大――そういふ順序で村山氏の「…あなた方のそれぞれの舌の上でGORO・GORO・BASHAところがされて，吸ひこまれたり，吐き出されたり，珍重されたり，時にはあらうことか，軽蔑されたりしても良い。何か大きな光が音が香が，あなた方の頭に残る事丈は事実である」ところの

エフェクトに，まんまと到達するのである。馬鹿げた，併し力強い，遊戯的な，併し合理的な，何でもない，併し何らかである。くだらない，併し愉快な，不真面目な，併し真面目に考へ出された，気まぐれな思ひつき，併し立派に仕上げられた，見えすいて居る，併し頭のよさがより以上に活躍して居る――。

三十日

雨は止むどころか，ひどい。終日家の中はさわがしい。夕刊は既に市内外に出水の多いことを報じて居る。

十月

一日

夜中，篠つくように降ったが，朝からがらっと晴れて，夏が帰ったように熱い〔ママ〕。青い空に白雲が重々しく飛んで目がいたい。各所の水害はひどいものらしい。五十年振りと伝へられる。

二日

天気はよりがかへったように又忽ちいけない。降ったり止んだり。だが夜は，厚い雲の切目から，十五夜の明るい月が出たりかくれたりした。夜，神田に出る。

三日

すばらしい天気だ。朝，彫塑社の遠藤宏といふ人が自分を尋ねて来た。くだらない，殆ど一時間の上□のハナシの後，自分は前に自分に送られた雑誌，彫塑三冊を持って帰って貰ふ。その人は，芸術と街頭とをむすびつけたり，色んな，まあ，そういった風なことをのべつに，自分の意見だか人の意見だかわけもわからなく喋った。だがいい時に倉沢が久々に尋ねてくれたので，其の人はすぐに黙って帰った。倉沢は，昼飯を一緒に食って，二時頃帰っていった。

四日　日曜日

寛公！

今日は日曜だろ。この天気はどうだ。俺は冬が嫌ひだから，こんな秋のいい日が惜しいのだ。日曜日はあまり出かけたくないのだが――人が沢山出るからな。だが，今日は特別だ。俺は早目に昼飯を食って，渋谷からの玉川に，知人を尋ねようと思ふのだ。おみやげには米粉（ビーフン）――これは台湾土産の最後の残りだ――を持って行って，豚でも買って俺が料理して食はせてやらうと思ふのだ。玉川はいいだらうと思ふのだ。その知人は今

年の夏から，花屋サンを始めたのだ。俺の来年の計画（花だよ）がうまくいったら，半分此の人のお蔭だと云ってもいい。何故といって，俺は少しも花のことを知らないし，江波ぢや安心して先生には出来ないからな。玉川はいいだらうと思ふ。百舌鳥でも鳴きやがったら，たまらないだらうと思ふのだ。

玉川はいいだらうと思ふ。殊に若い〔頑〕巌丈な花ヤサンの働き振りは――俺達には縁が遠いかもしれないが，溌剌たるものがあるだらう。

それからも一人，玉川のはづれに――覚えて居るか――田辺の勝チャンがしづかな離家で日本画を画いて居る筈なのだが。これも尋ねたいと思って居るのだ。どうもそこは話しで聞くと，末摘花でも居そうな処なのだが，さて行ってみないことには何ともわからない。案外，山男の隠家だったりするからな。

もうそろ〳〵仕度をするから，今日はこれでやめる。

六日か七日に来るって？　御馳走といったって，俺の処の趣味は格別前から変りはしないから，まあサーヂンか野菜のサンドヰッチか，チョコレートか，クリーム・フィンガー位ひ，あてにすると失望する程度のものだ。ではゆっくりやって来い。よかったら小室でもひっぱって来い。

高円寺坊拝

午後，玉川に〔中井良三郎〕良サンを尋ねる。なか〳〵遠い。だが，天気はいいし，道は静かだし，二十分も歩くと午後の日が気持よく暑かった。浄水路の叢にも，田圃の土手にも，そこにもここにも彼岸花が盛に咲いて居た。田圃も桃畑も草原も河土手も向ふの空も，明るい中に何やら霞んで，それが又閑かだ。良サンは真黒になって働いて居た。花園には花がとぼしかった。それでも大きな温室には，スヰート・ピーが整然と育って居り，トマトの苗，アスパラガスの子が小さな鉢に何百か綺麗に植って居て気持がいい。露地ものでは，コスモスがこれから咲かうとして居るだけで，ダリヤもカーネイションも百日草も，もう全く遅いが，苗物では，インゲン豆や金魚草やフリージヤや温床のシクラーメンや桜草や，それからまだまだ何やかやあった。第二の大きな温室も，もう硝子を入れるばかりになって居るが，冬までには第三の温室まで作らなければと，良サンは一人で忙がしい。丁度，惣ちゃんが遠藤氏，林氏と共に来て居たので，皆で夕食を作って賑やかに食べた。

夕食前に，一人で川べりに出て見た。広広として静かだ。川べりの何処にも〔糸脱カ〕釣を垂れて居る。プールでは，寒い夕方，若い人々が盛にとびこんでは顫えて居た。日曜なので，土手から河原へ人人が三人五人と絶えなかった。ロマンチックな慶應の学生は，赤い彼岸花を一束づつ持って居た。小供はバッタか何かを追って馳けずりまはった。日傘の女軍がさざめきながら，あっちこっちにちらちらした。だが河原はもっと広くて静かだった。夜十二時前に帰って来る。

五日
晴，曇り，夕方暫らく雨。
夕方，原瀬が来る。

✓赤子二人深くもねむる縁の下にこほろぎが鳴くこほろぎが鳴く
✓汽車通るひととき揺れのはなはだし此の家の赤子慣れてよくねむる

毎晩，英子サンの処へ行くので，夜時ならず赤ん坊に起こされ起こされ，此頃朝寝坊になる。

六日
曇。ぱらぱら雨。夜雨。
午後，三沢が来てくれる。

七日
降ったり止んだり。

八日
降ったり止んだり。

九日
止んだり，降ったり，降ったり。

✓雨五日よしなきままに暮れし宵を風荒むなり明日こそ晴れなむ
✓雨あとの夜道人なくぬるま風に湯屋のけぶりが白くなびけり
✓乾枯らびて死にし螻蛄かな　彼の夜遅く封筒に入れてつひ忘れける——

十日
✓いとど鳴く朝の曇りよ電燈の光さみしくパンを焼くかな

雨は決して止まない。お蔭で何枚油絵がかけたことか。毎日毎日雨戸を半分〆め切って置くような，蔭気な鬱陶しい，憎らしい，馬鹿馬鹿しい。石膏屋は一月近くも自分を待たせる。雨が

十一日　日曜日

情けない曇り日の朝――雨さへあった――の後に，秋の日が照った。情けない諦らめのような感情の後に，惜しいようなやきやきする気分が頭をもちあげた。週日の泣寝入りのような雨の日の後に来た，あやしげな罠の火だ――だが，喜びでなくて，何だらう。夜，築地に「ペリカン」[38] を見に行く。少し遅くなったので，第一幕の婿の出て来る所から見た。茲に一人の憎らしい婆さんが出てくる。自分はこんな婆さんの居ることを憎むのだ。解るか，自分は演出について云ってゐるのだ。それは，人間として三幕目で倅がこの母を憐んで居ることに不腹〔服〕を云ふのでは全くないのだ。何故なら，これは全く倅でなくたって，五十歩百歩とまではっきりして居ないとは云へ，五十歩千歩にした処で，自分達は尚多大な欠点を持って居るのは事実だ。だから，今自分が此の婆さんを引合ひに出すのは，全く別の意味でだ。即ち演出者の無自覚が，五十歩万歩にした処で，何処やら此の婆さんに似て居やしないか。写実主義的に書かれた戯曲は，何故写実主義的に演出せられなくてはならないのか。今，表現はもっと自由なものである筈だ。

二時代前の作品に於て，「写実」が目的だった。

これは前時代の，あまりに狂言的な内容，セリフ，演出の反動として無理からぬことであった。

一時代前に「問題」乃至「傾向――主義」（自然主義？）が目的であった。

実際を見つめて，当面の「問題」乃至「前後策」にぶつかるのも亦当然だった。

来るべきものは，結局は「理想」であるかも知れない処の絶対的な，人間的な「目的」が目的でなければならない。

それならば，表現は当然二義的になった。もっと自由であるべき「手段」である。

即ち二時代前に「写実――模倣――再現」が目的であった。

一時代前に時代的，一時的なる社会的「問題」乃至「傾向――主義」の「写実」との混血から，漸く前者が独立して「表現」が反動的に飛躍した。

来るべきものは，結局は目的の為の――「写実――再現」ではなくて，「表現の為の表現」ではなくて――目的の為の表現でなければならない。表現の形式からぬけて，目的への手段であらねばならない。目的の為の表現とは，何たる陳腐な常識だ。つまりは，芸術が最初にめざしたものではないか。にも拘らず，何と長い間，なまぬるく或はくだらなく横道にぶつかり，ひっかかり，的確な本質をさぐりあてられずに来たことか。これが婆さんに憑いた悪のように，全く運命的であったとしか思はれない実事〔ママ〕でなくて何だ。

より写実的でないことを誇る何の特殊な理由がないと同時に，より写実的である故に蔑むことは馬鹿げたことだ。より写実的でないことを非難する何等の理由がないように，より写実的であることを恐れるのは馬鹿げたことだ。すれば，当然写実主義的に描かれた戯曲が，効果の為に所謂表現主義的に演出せられ，表現主義の旗の下に描かれた戯曲が，効果の為に写実主義的に乃至自然主義的に演出され得ることは，常識である。

さて，自分は「ペリカン」を表現派風にやってくれなどいふ，だいそれた註文をするのではない。只あまりに運命的な婆さんのように，全く無自覚に不用意になされた再現にあきたらないのである。（皮肉な婆さんの姿ではないか。ストリンドベルヒを益々大きく見せてくれるには，非常に効果があったとさへ云へる。）

自分は，自然主義的に扱はれて，すばらしい成功に達した芝居を，チェェホフの「桜の園」に見た。それは或る戯曲に対しての，自然主義的演出の立派な存在権を証する。だがそれとこれとは全く別だ。例へば一つのことに就いても，次のように思はれる。チェェホフの戯曲には，最も再現的な演出に応はしいような，丁度日常茶飯事のような，適度の間延びと無駄がある。「桜の園」には，無駄にされていい，或は無駄らしくされていいセリフが沢山ある。そして，チェェホフは，此の無駄を実に適切に効果の為に駆使してゐる。云ひかへれば，茲では此の無駄自身が，非常にものを言ってゐるのだ。（厳密に言へば，的確に企図された無駄は，既に無駄ではないのである）。「桜の園」は，内容は別として，外面的にはそのように日常茶飯事的である故に，再現的表現が最も必然的だった。

処で，「ペリカン」は小さな三幕ではあるが，全く質を異にして居る。それは，譬へば酸素量の多い液体空気のように，寸分の無駄がない。だから茲では，一つのセリフが死に，一つの言葉が無駄になることが惜しいのである。あまりに或は無意識な写実的演出が，どんな結果を齎したか。読んだだけでさへ，びりびりくるような言葉が，あっけないナイショ話しの再現となってしまったのである。惜しいことではないか。尚云ふならば――「いいえ。ちっともこはかないわ。恐怖に似て恐怖でない感情があります。口を出さないで気色にあらはれる感情があります。気色にあらはさないで挙動に見える感

情があります。気色にも挙動にもあらはさない感情を，奥深く包んでゐる詞があります。」

此のマソンヌリイは家常茶飯の冗談であるよりも，更に表現的なものでなければならない。それならば，あまりに運命的な写実，ほんの少しばかりナチュラルでないことを恐れ，ほんの少しばかり実際的でないことを，惰性的に無自覚に避けたりするかはりに，一つ一つの作品に対して，一つ一つの的確な演出技巧をとって貰ひたいのだ。そのフレキシビリチィを欠き，或は蔑むならば，自身の演出法に合適なる戯曲を厳密に選んでほしいのだ。

久しぶりに人中に出ると，色んな人に逢ふものだ。吉田の謙ちゃんが，ほんものの露西亜の帽子を手に入れてお得意だ。和田の精チャンの呑気な愉快な顔。昔の野中花子サンがやせて，益々濃厚になって――赤ちゃんが生れたのだって？　キツネ[39]のあばさんは，熱いコーヒーを呼んでくれるし，チーチャンは頭中大きな髪の毛を重さうにしてゐる。

十二日

快晴。夕方，小石川へ行ったが，叔母様の方は御客があったので，〔土方与志〕久敬と築地に行き，芽生座[40]の公演を見る。

十三日

寛公！

微苦笑の味は俺も知ってゐる筈だ。たいして，にがいものではないが，どっちにしたって馬鹿馬鹿しいものだ。

処で，それから先が君と俺とではちっとばかり違ふだけだ。君は来年はしっかりしたものを出すつもりだといふ。俺はあれっきり御免を蒙ったのだ。

処で君はアトリエがあって，充分に製作が出来るぐらひのブルだといいと云ふ。だが俺にはそれよりも，俺のものを無条件で買ってくれるブルがほしいものだ。何故なら，こんな風では，俺のところは遠からず再短縮だってさ。更に云ふならば君は，兎にも角にも三ヶ月もぶっつづけにモデルが使へるのだからな。

どっかに旅行しようかと思ったが，そんな金を使ふより製作を続けようと思ってゐるのだって？　とんでもない。頭が空っぽで製作が出来るものか。少くとも，そんな消極的な時に製作なんかするものではない。思ふ存分遊んでくることを俺は勧める。云ひ過ぎたら許して貰ひたいが，俺の平生の考へ方は，君がよくしってゐることと思ふから，敢てこんなことを云ふ。

だが又，吉川氏のアトリエは，思ひきって落着く為には，旅行よりもいいかも知れない。やるなら，まあ思ひきって気楽に，ぽかぽかと暖い昼中やるのだな。研究は大切だが，

製作には気分の方がよっぽど大切だ。俺には絶対にさうだ。

更に君は作法に就いて心配（?）する。作法は必然的に内容と関連する。特に考へ出された作法なら，俺は御免を蒙る。（厳密な意味ではだ）。俺に云はせるならば，思っ〔ママ〕きったフレキシビリチイを持つのが若いものの特権であり，大きな完成は，此の□□□□□□□□エラスチックなポリゴナルなものをいぢめつけて，無理な或は特別な個性的なものにすることからでは決してなくて，此の多角の極めて自然的な凝結からこそ渾然たる，より大きな，より自然な，より必然的な個性格が完成されるのだ。

譬へば俺達に本当の静けさ，淋しさがわかるのは，人生の五十年に達するまぎわだ。さなくば，特別な運命に結ばれた――それを俺は幸福とも不幸とも云ひきれない――例へば短命の人に運命づけられる，恵まれたる（ここでも俺ははっきりと恵まれたるとは云ひきることが出来ない）センシビリチイ□□□のみが感じ得るのだ。そうでないものは，つまりは多少ともセンチメンタリズムを脱ききることが出来ないのだ。

さて，も一つ，パラドックスを用ゐるならば――六尺豊かな全身像は何と専門家的であるか。だが又三寸の首に肅然たる宇宙の姿，人生の意義を斂めることにこそ，一人の大芸術家の一生を惜みなく捧げる価値があるのだ。

君の気持が充分に出た，君の目で見た，君の傑作が出来るだらうと，今から楽しんでゐる矢先に，これらの言は或は無躾であるかも知れない。だがそんなことを遠慮しなければならないような間ではないと一人できめてゐるのだ。ぢゃ，さよなら。

〔日脱カ〕
今明日のうちに松平が来てくれる筈だ。俺の方も新らしい製作がどんどん出来る筈だ。ぢゃ，さよなら。

功

天気は怪しげだったが，何うにか晴れた。雲が多い。まだまだいけない。夜は早く，八時には英子サンの所に行ったが，もう正態もなく寝入って居た。十時まで　イル　フェ　ァユンヌ　グリマス　なんてやって居た。それから，すばらしい脚本を読んだ。作者はモルナー，本の名は「リリオム」。リリオムの身についた憎しみ，それも亦何うする訳にもゆかなかった愛（?）――優しい心。根深い憎み，粗暴，或は悪（?）と全く運命的な愛（?）　殊には執拗な，親なる哀しみ。天の判事も十六年の煉獄も，遂に揉（た）め得なかった，リリオムの憎しみ又粗暴，その平打ちをさへキッスされたと受取って驚くルイゼ――それらを結ぶ神秘の糸――その秘密をふり返って「誰かがお前を打って，打って，打って――それでもお前は少しも痛くないと云ふような事」をうけがひ，又さとし，悲しい思出の中にひめかに嬉しい花を見る，ユリイ――それらを結ぶ紐の重荷――そんな不条理な，けれどもそんなに優しい愛よ，愛よ，愛よ――而も亦そんな愛も亦何の力に価ひしなかった。憎しみよ，憎しみよ。一毛の真実をも見せないで，現はれて現はれて消える事実――それだからこそ，かりそめにも，天の巡査が絶対に必要なのではない

か。事実と何処に係はりがあるのか，何の係はりがあるのか，知るよしもない，遂に知られない，知られない，哀しい人間の心である。空しい真実である。

では聞くがいい。

声――ステファン君！

声――うむ

〃――馬鹿に蚊が居るね。

〃――居る

〃――葉巻を持ってゐるかい？

〃――持たん

これまでより少ないようだからね
〃――賞与金が又出るよ――然し今度は悪いよ――□□□□□□□□□□□□□□□
。政府があれだけほうって置くんぢゃ、あまりありがたくないね。
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□　君だって永年辛抱して，白髪になるまで働いたんだ，もうそろそろ死にかけて居るんだ――ねえ

声――その通りだ。

声――ねえ。

何てあまいんだらう。何てうまいんだよう〔ママ〕。美しい夢のようなおはなしぢゃないか。

十五日

一ヶ月の間待たねばならなかった，殊にはこの三日の天気に待ち労れた，石膏屋が来てくれる。天気は溢れるような日光と高い空と全く風のない静けさとで，永遠のような，それも少しも恐ろしくないお話しの世界の秋の昼だ。三沢がひょっこり来てくれる。石膏屋に仕事をまかせて，三沢と裏の方を散歩する。閑かである。薄の穂が銀褐色の波を見せ，風のない静けさ，赤蜻蛉が二つづつ二つづつ，無数に，縦横に，無尽に，綾を織って，群翔する。山奥のような松林の蔭がある。明るい檜葉垣の道が真直に続く。空が存分に広がって見える。百舌鳥が鳴く。小蟲がぶんぶん翅を鳴らす。秋の花が燃えるように赤い。その中に快く上気する二人，二人の遠慮のないお喋りが，一時間半も二人の足と一緒に歩いて居る。

〔欄外に記す〕
[✓二つづつ二つづつ飛ぶ赤蜻蛉薄の原に腹のへる頃]

夜，新橋演舞場にゆく。弓張月の幕切前から見て，中身の「六歌仙」と，小さな「亭主」（小山内氏作）を見て，「八百蔵吉五郎」を残して帰ってくる。六歌仙の最後，菊五郎の大伴の黒主は古式で，錦絵もどきの懐かしいものだ。

✓縁先のふとんの上の赤とんぼ朝見しまゝに三つ並べり[41]

✓安けさは縁のふとんの赤とんぼ見れども飛ばず追はば逃げめぞ[42)]

十六日

午後，三沢を尋ね夕食を御馳走ニなって，夜，三沢と江波を尋ねる。

十七日

夜遅く降り出した雨が，終日止みまもなく降って，風さへ幾分荒れ目なので，終日雨戸をさしかけてある室は，雨戸のひま〳〵からもれる光では薄暗くて，寒くて――こんな頃，こんな日になると，自分は源氏物語を何故か思ひ出す。夕方近くなってから，後の方，「御法」から読み出して，夜に入るまで読み耽って，「総角」までも読んだ。これは正しく□□黴の□□□臭ひだ。だが又それは，人間が斯うもなり得る懐かしい香の匂ひだ。

十八日　日曜日

雨からだんだんだんだんによくなって，夕方までにやっと晴れる。保ちゃん〔小城〕が晩方帰ると，うとうと寝くなったが，原瀬が来たので，十時過ぎまで話して居た。一寸また寝むけがなくなって，寒さがまさったようにも思はれる。

十九日

朝早くから，全く早かったので，原瀬の家の前まで行ったら，あんまりひっそりして居るので，そのままそこらを一時間程も歩いた。可憐な丘があり，その丘を越えて，女学生が二人三人づつ消えて行った。ポカポカと日あたりのいい塗丹屋根の上に，□□□よごれた白猫が赤蜻蛉のおりるのを用心深く待っては飛びかかって居る。田畝跡の小川のあたりに，葦がさびしい穂を垂れてゐる。原瀬の処では，丁度朝の食事中だった。午に江波を尋ね，一緒にブロンズ屋に行って貰ふ。

夕方家に帰ると，間もなく文ちゃんが来る。

二十日

夕方，江波が来る。一緒に三沢を尋ねる。

二十二日

午後，遠山サンをお尋ねする。病気がおもはしくないので，安静にしてゐると聞いたので御見舞したのだが，心なしか弱って居られる。妹さんのことなどあった後だから尚更でもあるのだらうが，御気の毒だ。あまり務めて話されるので，熱でも昇ることを恐れて，一時間そこそこで辞して，小城サンに行く。

二十三日

午後，帝展を見物するつもりで出たら，中野の駅のこっちで，黒田孝雄[43]，池田清就[44]に逢った。二人とも一年志願兵の伍長サンの格好である。昨日から曇りつづけで暗くて，それに帝展は込み合ってあまりおちつけない。が，又たいして落着く必要もないかも知れない。兎も角，自分には全く縁の遠いようなものばかりなのだから。日本画を見ないで，西画を一通りと彫刻を二通り程見て，暗くなる前に出て，江波の処へ一寸よって帰って来る。

二十四日

曇ってしみったれて寒い。

午後，築地のマチネーにゆく。チェェホフの「熊」[45]と「白鳥の歌」と「犬」[46]だ。「白鳥の歌」は，今度は，友田と丸山だ。「熊」がいい。夜まで残って，同じチェェホフの「叔父ワアニア」[47]をも見る。労れてどうにも見て居られないので，二幕目だけ見ないでしまった。「桜の園」には及ばないまでも，三幕，四幕あたりに，捨てられないものがある。

二十五日　日曜日

✓かたくなりし桐の葉鳴りを白雨の降ると思ひて覚(さ)めしさびしさ

午後，江波を尋ね，一緒にブロンズ屋に行き，上野を歩いて，江波の所へ帰り，自分は五時四十五分の汽車で鎌倉へ行く。梅子叔母様は，東京に出られ，十二時に帰って来られる。

二十六日

今日こそ晴れて，静かで暖かい。朝のうち，和子サンが来て，縁側で話して行った。晩八時四十分の汽車で東京に帰って来る。

二十七日

昨夜，頭が重くて早く寝た後で，保ちゃんが来て宿ってゐた。天気がいいので午後，保ちゃんの〔ママ〕と裏の方をぶら〳〵二時間程も歩いて来る。晩になると，又々頭が重いので，早く床に就く。

二十八日

石膏屋が来てくれる。天気は上上。

晩方，原瀬が来る。一緒に江波を尋ねたが，留守。神田を歩いて帰る。

二十九日

曇って怪げな天気が，夕方までどうにか保たれる。朝から明治神宮競技大会を見に出かける。夕方帰ると，晩になって雨が降り出る。明日をあやぶみながら寝る。

三十日

雨は止んだが，何時降り出すとも知れないような日が一日続く。朝から明治神宮競技大会を見にゆく。夕方帰ると，晩に原瀬が来る。文ちゃんが来て宿る。

三十一日

日本晴れ。ぽか〳〵と暖かい。朝から江波を尋ね，一緒にブロンズ屋に行き，昼食を江波の所で済ませて，三時に築地小劇場にゆく。そこに，すみちゃん〔小城　澄子〕といそちゃん〔村松　磯子〕とが居る筈だった。そして，自分を喜んで待ってゐてくれた。銀座を歩いて，いそちゃんを送って目黒に出，すみちゃんを送って小城サンまでゆく。ケンチャンと雪ちゃんが来合はせ，かるたが始まる。若い連中には，とてもかなはない。自分は読んでばかり居る。

磯チャンには，今日で二度目で逢った訳だ。はじめて昨年十一月二日に逢った時，前から知って居たような気がした。それから長いこと逢はないで，満一年の後，今日逢ったら，昨日まで毎日でも逢って居たような気がした。気のおけない人だ。

十一月

一日　日曜日

朝からぽつぽつ雨が降り出したが，明治神宮の競技を見に行く。午後にはひどい雨になったが，傘をさして泥□□（んこ）水の中のラグビーフートボールを前半がすむまで見て，夕方帰って来る。

二日

ひきつづき止みさうにない雨で寒いので，終日家に居て何もしない。

三日

明治神宮競技を見にゆく。晩，江波がブロンズを持って来てくれる。

四日

天気は上上。ちっとばかりのぼせぎみだ。一日家に居て，何もしない。こんな日に三沢から手紙が来たので，とりとめもないことを長々と書いてやる。夕方驟雨。晩は厚い雲がきれて，後で月が寒々と光って居る。

五日

晴。晴れては居るが雲が厚く，風が冬めいてゐる。

朝から帝展見物。午後，小石川へ行ったが，叔母様は風邪で寝て居られるし，外の人は留守だったので，直ぐ辞して，江波を尋ね，珍らしく静かなので，蓄音機を――ベートーベンの第九シンフォニーをはじめからしまひまで聴く。夕方帰る。

〔三沢〕
寛ちゃん。……

……処で頭の中が紙屑籠では全く困る。だが又そいつは番茶のせいばかりではなさそうだ。番茶よりも，もっともっと根本的な原因があるのではないかしら。といふのは，殊更パンや紅茶やチーズを嫌って，飽き足らない感情を無理に叱って，番茶に向ってゐるといったような。俺の考では，そろ〳〵番茶番茶の一本調子に堪へないで，駄々をこね出すのこそ感情の正直さだ。感情が受入れない理智は，まだ〳〵本物ではない。それよりも，もっと広い世界に出しゃばって見るがいい。広い世界に刺戟を求めて，自由な感情に正直にものを云はせるのだ。失敗したら後戻り，転ばぬ先の杖は年寄にのみ絶対の真，若いものには七転び八起きの意気こそ喜ばしい。……

六日

澄子様。

先達は喋って，喋って，喋りぬいて，随分くたびれました。一体私は図に乗ると，随分よく喋ります。それも，とりとめもないことを気ままに喋るのが大好きです。ですが，今日はあまりお喋りをしないで，直ぐに此の手紙を書く第一義――何てしちっかたいのでせう――に就きませう。処で，どうでせう，明後日の日曜日は，何か特別な計画でもおありですか。若しそんな事がなかったら，教会の帰りにでも中野に遊びに来て下されば，喜んでお待ちしたいと思ふのですが。なに，別に特別な動機があって，こんなお誘ひをするのでもないのです。唯，別に理由のない時には，物事はいつでもずる〳〵になるものです。そうでせう，例へば今日は私のお誕生日だからいらっしゃい，とか，二十五日はクリスマスだからいらっしゃい，とか，はっきり云はれると出かけ安い。処が，そのうちに遊びに来ませんか，えゝそのうちに行きます，といふやつはちっともあてにならないようです。そんな訳で，別段の理由も，或は御馳走もないのに，明後日では如何でせうと，殊更に機会をこしらへてみたのです。

さて，中野は決して特別に何の面白いことも，いいこともない。で，まあ，最初に「私の部屋」を御紹介しませう。変りものですが，退屈なさるようなやつではないでせう。それから，麻雀が長いこと出さないので，カビが生えさうになってゐます。こいつも，簡単におぼえられて一寸面白いものですから，おぼえて置いていいでせう。それから，菊の花が咲ききって，「あと二日程あらば散りなん」といふ処です。それから，もうと

りたてて何々といふ程のものもありませんが，何かかにかあります。でも，それだけでもいいでせう。では外にもっといい計画でもお持ちあはせがなかったら，何卒おいで下さい。御兄姉妹のどなたでもおいで下さるならば御一緒に。さて，尻切れ蜻蛉でひっこみがつかなくなりました。馬車をもて，馬車をもて，オホン，オホン……とでもやりますか。ぢゃさよなら。

久功

七日

夜，築地にゆく。出し物は，イプセンの「社会の敵」[48]。これは，イブセン〔ママ〕の中で，永遠性のあるものの一つだ。だが又，今時此の戯曲が真面目くさって演出されたら，それは演出者が気がきかないのだ。否，当時に於てすら，作者は思想的には極めて真面目な問題として突込みながら，実行的には露骨な茶気を以って扱って居るのだ。にも拘らず，当時の群衆には，恐らく真面目な憤激を以て迎へられただらうとうなづかれる。現代人には，何やらナイヒリスチックなものがある。だから，思想的真理が，さう単純に楽観的に人々に受取られない。即ち人々は，此の思想を立派にうなづきながら，実際との距離を事実として認めてしまふから，或は諦らめてしまふから，そこに出て来るあまりに無邪気に実行的な人物を，皮肉な愉快を感じながら客観する。で今日の演出者は，これを実に現代的な喜劇にした。実に愉快である。実に愉快だった。

築地で武さん〔土方久武〕に逢ひ，帰りには久敬と三人で銀座を歩き，武さんは遅くなったので，家につれてくる。

八日　日曜日

武さんが帰ると間もなく，澄ちゃんが一人で来た。遅く昼食がすんだら，三沢がひょっこりやって来た。三沢が日暮前に帰ってから，澄ちゃんを送って目黒まで行って来る。

✓郊外の暗き夜の道に往きあひし男しみ〳〵と歌ひいでけり[49]

九日

夜，新橋演舞場に新橋温習会を見にゆく。出し物は，一，（新曲）四季の花筐，二，鞍馬獅子，三，忍夜恋曲者，四，奴道成寺，五，色彩間苅豆，六，養老

十日

一日家に居て，何もしない。晩方，原瀬が来る。

十一日　□□□（十二日）

とう〳〵雨になる。寒い。

十二日　□□□（十三日）

明るい朝に，曇った午後に，雨の夜。

朝，原瀬をたづね，帰ると江波が来て居る。

十三日□□□（十四日）

終日寒い雨風，暗い日，家に居て小説など読んで居る。夜，佑サンの処に行き，十一時まで久々で花を引いて遊ぶ。

あゝ，久しい日の後に
しみじみと私の薄暗い部屋に帰って来た，（私）
私の薄暗い部屋，つつましい秘密が
以前のように私を迎へて蠢くのを感ずる
それは黴のような，又埃のような臭ひだ
天ぷら屋の三つの小壷に
（一つは「天金」のみやげ
一つには，「北むら」と読まれ
残りの一つには，何もない）
異形，五つの生蕃パイプがさされ□□□（て立ち）
同じ生蕃の，両の手に平たい胸を抱いて蹲る黒い土偶
蛇形の，又腕なし人胴の木匙
古風な油壺に可憐な京都の首人形が仰向き
赤と黒と，青と黒と，黄と赤との
五つの支那芝居の隅〔隈〕取人形が白い眼をむき
都踊のおだんごの皿に
大和唐招提寺金堂鮪形楊子差の青い光が曇って居る
宇治黄檗山の粗末な茶椀に零餘子がころころと転がって居り
十九世紀舶来のギヤマン紙鎭の中に
ロココ風小仙女が亀の子のような首手足をぶるぶると震はせる
更に自作の面像，裸胴の数々
それらが大きな安物，印度土産の更紗の上に
埃と一緒に積って，たまって
（或時それらは慎ましく互に控へ目に溶けあって居るようでもあり

或時それらは憎しみに漲って互に存在を固執するように見えるのだが）
宿命的な沈黙の中に淀んで居る
只一つ雑色の書籍のぎっしりつまった，同じ汚れた本箱の上に
こればかりなまなましく新らしい懸涯〔崖〕の菊が垂れ
今一つ，机上銅壜に
これは大輪のしたたるような時色の菊が三輪
外（そと）の日の記憶のようによそよそしく明るい
さて久しい日の後に
それもこんな嵐めく雨風の
それも十一月のひしひしと寒い日に
ますます薄暗い，空寒い私の部屋に帰って
外（そと）の日の記憶をよそ人のように懐かしみながら
いつか，ほほゑみたい，誇らしい独りの秘密へと引かれてゆく，（私）

〔×を附す〕

✓いねて見る真夜（まよ）の床かへの懸涯〔崖〕の菊静もれり雨も止み居て[50]
✓室ぬちに懸涯〔崖〕の菊咲き揃ひつ真夜中過ぎてさゆりもゆらず
✓夜の床の懸涯〔崖〕の菊のうす日の敢て静もる花の見のよさ
✓ひたすらに静もりあへる懸涯〔崖〕の菊の群花は見る程によし[51]
✓衰へと見らば見るべき懸涯〔崖〕の菊あまりにも豊けく咲きつ

十四日

天気はすばらしくよくなる。午後一時半に江波が来る。待つ間を二人で花を引いて居ると，三時に兄が保ちゃんをつれて帰って来る。間もなくポン，チーが始まる。前半十六回，後半八回で勝負がつく。それから……

十五日　日曜日

いい日だった。少し風が烈し過ぎたけれど。そしてそれは凩めいたものだったが，寒く冷たくはなかった。午後，邦楽座に行く。ボリス・ラス氏の独奏会だ。ロマンチックな方よりも，明快なものの方がよかった。その明るさ，愉快さが，デリケートでなくて寧ろガサツなムキダシなのがうれしかった。静かに引入れる芸の力といったようなものよりも，クルードな叙事な力が更に自分を喜ばせた。此頃の自分にはそんな方が嬉しいのだ。もっと烈しくってもかまはない。曲に対する理解とか解釈とか云ったような方には，別段特殊なものも，深いものもないらしかった。だが此頃の自分には，すなほな幾

分外面的であるかも知れない所の，力そのもののようなものの方が力がある。引かれる。そんな意味で，今日のラス氏を自分は高く買ふ。

十六日

澄子様。

態々の御礼で恐れイリヤの鬼子母神。多分一番嬉しかったのは，でなければ一日独りお留守番をしなければならなかった処の私でせうよ。三沢の寛ちゃんは，あれっきりぐうともすうとも言って来ません。あの翌日は，新橋演舞場に温習会を見にゆきました。新橋の芸者さんが四五十人も出てやるので，綺麗でもあったし（尤も，オペラ・グラスでよく見たら，案外シャンは居ませんでしたがね），面白くもありました。

それから，一寸退屈な日，心細い，暗い日，寒い日が続きましたが，一昨日は，お兄様が来て下さったので，ポン・チーの決勝戦が華々しく開かれました。

処で，昨日は又，邦楽座に音楽会を聞きにゆきましたよ。プロフェッサ・ボリス・ラスのヴァイオリン独奏会です。久々でいいものを聞いて，大いにいい気持で帰って来たのですがね，処がです，私の昨日のフランス語の第十一課にぶつかってしまったのです。世の中には何て，とんでもないおぢいさんが居ることでせう。何，今もっとくわしくお話ししますがね，実は，題は，大変いいのですがね，「幸福なる生を送らんが為」といふのです。処で斯うなのです。「あるおぢいさんの医者が居りまして，其の子に手紙をやり，次の訓戒を垂れました。私どもは之を紹介することを喜んで居ります。」（嘘だい，ちっとも喜んでなんて居るものか），「日に二時間散歩すべし」（こいつは健康上いい事だらうよ），「毎夜七時間眠るべし」（これも保健上望ましいことかも知れないが，そうきっちりうまくゆくものではない），「目醒むるや否や直ちに起き出づべし」（これから寒くなるといふのに，何ていやなお説教だ！），「起きるや否や直ちに働らくべし」（何うも斯うなってくると，この訓戒を守るには，何やら天才的なものが必要になって来そうだぞ）。さてこれからがます〳〵大変になるのですが，まあ聞いて下さい。「飢たるときにあらざれば食する勿れ。食する時は必ず除食せよ。渇きたる時にあらざれば飲む勿れ。話すべき時にあらずんば話す勿れ。言は思ひの半ばにして止むるべし。」ねえ，何て非現代的なんでせう。ですが，構ふものですか。こんなことを言はれたら，あなただっておとなしく言ふことを聞きやしませんね。「汝の署名し得る所のものにあらざれば書すべからず。汝の語り得る所にあらざれば行ふ勿れ。」はいいとして，「人汝を信用すべしと忘るる勿れ，然れども汝は人を信用する勿れ」ですってさ。全くうがって居ますよ。ですが，これではあまり淋し過ぎるといふものです。其上あんまりエゴイスチックでさへあるように思はれますものね。それよりも（人は信用しないかも知れない。けれど私は信用する）といった方が，よっぽど個人主義的で，よっぽど暖かいと思ふのですが，

何うでせう。まあいいです。

処で台湾から帰って後，私はあんまり勉強したものですから，ヘッヘッ，石膏屋のお払ひが四十五円たまってしまひました。四十五円ですよ。私はびっくり箱から飛び出した猫のように途方にくれて居るのですが，何，どうにかなるさ，と思ってみるのですが，現にどうにもならないぢゃないかって，デモンがおっしゃるのです。まあいいです。

オー　ルヴォアール

久功。

十七日

そろそろと曇る。午前に小石川へ行き，二時半に江波の所へ行き，夕方帰って来る。夜，雨。

十八日

雨は引つゞき降ったり止んだりして居る。独り家に居たら，午後，本田サン[52]が兄を尋ねて来たが，兄は留守だったので，自分の処で夕方まで三時間程も話して帰られる。

十九日

二十日

〔欄外に記す〕
［「暖イ雨」］

小さな雨が降ったり止んだり。

（一年前の今頃）

二十日の寒天の後に降り出でた
暖かい雨だ
これは水晶のように懐かしい雨でなければならない
あゝ，閑かだった第一日
その日，名残の百舌鳥が悲しく叫んだ
閑かだった第二日
日の光がどんなに明るかったか
又，空がどんなに深く輝いたか
漸く充実に向った第三日
私は野に喚き
街の夜をかけり
快活な浸りきった心である
怒りを大胆に怒り罵り
痛みを倍して身に感じ気を晴らした

悲しみと喜びと――総べて！
又行為と思想と
意識に訴へる程のものは総べて
享楽の爐に投じて狂奔乱舞した
おゝ，大成の第五日
暴風だ，暴風だ
黄塵が地をはらって宙に荒れた
落葉の雨が戸を打ち
喚声，怒号
招魔の渦がすばやく地を這ふのを私は見た
蛮怒の快感
更に継ぐ悲鳴
更に継ぐ喜喚
再びみじめな荒廃へと急ぐ為に
再び残忍な最後へと突進する為に
みじめな荒廃から生れるガムシャラな出発
残忍な最後から生れる華々しい降誕
何ていい気味だ
何てあまいんだ
源因は運命的だ
出発は運命的だ
道程は運命的だ
在有は運命的だ
だが又，運命的な降誕から何故に華々しい色が，綾が，香りが
多角な積極が生れてはならないのだ，生れる筈がないのだ，生れる権利がないのだ
生れ出る力がないとでも思ふのだ
生れ出る意志をさへ持つことを許さないのだ
憐みか？　そんなものは何処か天にでも任せて置くがいい
次に来るものか？
目的だ！
結果だ！
最後だ！
破滅だ！
無だ！
だが又，それにもまして勢のいい事実だ

それにもまして愉快な事実だ
それにもまして　事実だ
□□□□□□□蠱惑的な□□□
それにもまして
□□□□□□□充実した事実だ
事実だ，暴風だ，暴風だ
黄塵だ
叫喚だ
怒気だ
街頭だ，交渉だ，衝突だ，争闘だ
破壊だ，爆音だ
征服だ，勝利だ！
否そんな処に止まらない
決して止まらない突進だ
変化だ
多角だ

それから
嵐が過ぎた――
それから
平静が来た――
無為が来た――
沈黙が来た――
沈黙が続いた――
あゝ，二十日の寒天の後に降り出でた……
これは水晶のように懐かしい雨でなければならない

〔×を附す〕

二十一日
午後，香蘭女学校のバザーに行く。

二十二日　日曜日
夜，築地にゆく。ゴール〔ママ〕キーの「夜の宿」（どん底）[53] だ。大変な大入だ。はじめからしまひまで，立つづけで見てゐる。

二十四日
澄子様　先日はありがたう。あなたがあまり一生懸命働いて居るので，さよならもし

ないで帰ってしまひました。

処で，帰って夕御飯を食べると，其頃からおなかが痛くなり出しましてね。あんまり食べたのかも知れません。それからその晩，ホシのチャーコール錠を六粒飲んで寝たのですがね。少しはきいたのでせう。ぢきに寝ましたから。翌日はまたいたいのですね。胃なのですよ。私は胃がいたいようなことは絶えてないのでせう。腸の痛むのより気持のわるいものですね。その朝はネオ・タルビンを四粒呑みましたよ。お昼まで仕事をしましたがね。ひどくもなりませんが，非常にさっぱりするようなこともないのですね。それから，お昼の御飯も普通に食べて，今度はニンタンを三十粒呑みましたがね。それから，晩は築地に行きました。キツネでサンドイッチを食べて，コーヒーで，途中で買って持っていった太田胃散を二杯呑みました。それから次の次の幕間で，今度はシュークリームを二つ食べて，又コーヒーで胃散を一杯呑みました。それから昨日ですね。昨日は一日，午後二時間程散歩をしましてね。やっぱり悪いといふのではないのですがね。やっぱり非常にさっぱりするといふのでもないのですね。それから昨晩は，中沢サンにおよばれでしてね。牛鍋をつっついてお酒を大分飲みましたよ。それから今日でせう。さっき江波が来ましてね。お兄様と三人でハナを三年引きましたよ。これは，私が一番で，江波が二番で，お兄様が三番でしたかね。処が，江波も亦二三日前から胃が悪いのだそうですよ。そしてやっぱり悪いといふのでもなし，やっぱり大変さっぱりするようなこともないのですね。それから何となく体がだるいのまで，私と同じなのですよ。で，これは時候あたりではないかといふことにしたのですがね。少し気になるようでもあり，このまま直ってしまうようにも思はれるのです。まあ，そんな訳なんですかね。それから，今日三沢の寛公から手紙が来ましてね。斯うです。「あれから足が棒になる程探しまはったんだが，お気にめしたのが見つからないのさ。今では閉口して，あきれてゐる。だが，無理もないね。第一条が家賃が安いこと，第二がステーションに近く，買物に便利なこと，第三が湯殿がついてゐること，第四がガスのついてゐること，第五が庭があること等等等等」ですってさ。私の考へでは，こいつは今時の注文には幾分蟲がよすぎると思はれるんですがね。「だが最大の目的たる第一第二がどうもピッタリとこないんでね……今日もこれから家捜しだ」。どうです，可哀さうぢゃありませんか。神様，どうぞあのおとなしい三沢の寛公にいい家をお与へ下さいまし！

さて，其の次に磯チャンにお逢ひの節，次のようにお伝へ下さい。えゝ，やっぱり第一に，先日はありがたうってね。それから，私はあの翌日，築地へ行って来ましたってね。私はあの芝居を非常にいい芝居だとは思ひませんが，非常に面白い芝居だとはいつも思ふのです。ルカ爺サンはあまりうまく出来過ぎて，あんまり理想的過ぎるから，私は一番好きだとは思ひません。サチンは大きな坊ちゃんですが，ほんの少しばかり思想的過ぎて，ほんの少しばかり理窟っぽ過ぎるから，私は一番好きにはなれません。ペペルは悪党ですが，強いところがあり，底の底に何か持って居そうですが，あんまり主人公ら

しく書かれて居るので，私は一番好きにはなれません。

クレシチは正しい人ですが，あんまり一面的で，心丈夫な土台とも云ふべきものを持たないように思はれるので，（四幕目で，既にあぶなっかしい所がほのめかされて居ますね）一番好きにはなれません。韃靼人は正直な小心な人間ですが，そのあまりの真面目さと掟とがたたって，あまりに独りを守り過ぎて柔らかみがない上に，可哀そうでもありますが，他国人らしいひがみといふようなものが，いつでもつきまとって居るので，一番好きにはなれません。そんな訳で，私の一番好きなのは，帽子屋のブブノフです。殊に二幕目のブブノフです。「もう馬鹿はよせよ，ワシカ。おめえはぢきと勇気を見せたがる……勇気は森の中に菌をとりに行く時，役に立つものだ……ここぢゃ，そんなものは何にもならねえ。」，「何をおめえ達はぐず〳〵言ってるんだ。わからねえな……一体，真実のどんなのが入用なんだ，ワシカ。そんなものが何になるんだ……おめえについての真実なら，おめえ，自分で知ってるぢあねえか……世間様も御承知だあ。」，「人間といふ奴は，川を流れる鉋ッ屑のようなものだ……出来上った家はちゃんと立ってゐる……だが鉋ッ屑はどん〳〵流れてゆく。」，「誰だって何の為に生きてるんだかわからねえ……だがやっぱり生きてゐるんだ。人間は生れて暫らく生きてゐて，そして死ぬんだ。おれだって死ぬんだ。おめえだって死ぬんだ……」，「韃靼人といふものはよく寝るものだ。」 それから三幕目では斯うでしたね。「おれは経験があって言ふんだ。おれも一度うまい時に逃げ出したことがある。お蔭でシベリアを一廻りして来た――本当だよ。全体かういふ訳だ。おれの嬶が内の職人と乳くりやがったんだ……そいつが又，職人の中でも中々腕のある野郎でね……犬の皮から綺麗な白熊の皮をこしらへるんだ。……猫の皮を染めてカンガルーの皮にするんだ……麝香鼠にするんだ……何んにでもお好み次第なものにするんだ。中々器用な奴だったよ。そいつとおれの嬶がくっつきやがったんだ……あんまりな夢中になりようだったから，若しやおれに毒でも食はせやしめえか，それともどうかして，おれを無い者にしやしめえかと思って，一刻も気の安まる時はなかったよ。おれは幾度も嬶をなぐった……するとその職人の野郎が又，おれをなぐるんだ……随分ひどい撲りようをしやがった。或時なんか，おれの髭を半分から毟り取りやがった。そして，肋骨を一本折りやがった。なぐり返されてみると，おれもおとなしくしちゃいられねえ……鉄の物指で嬶の頭をガンと一つ食はしてやった……まあ始終夫婦で戦争をしてゐたんだな。とう〳〵おれは考へた。これぢあ迚も駄目だ。おれの方が負けるばかりだ，とね。そこでおれは嬶をやっつける計をめぐらした……それともうすっかり決心をつけた。所がうまい時に不図自分に帰った――そして，逃げ出した。」

それから斯うでした。「つまらねえ事には，工場が嬶の名義になってゐたんだ。おらあ着のみ着の儘さ。尤も正直を言や，よし工場を持ってゐた所で，いづれ飲み潰してしまったに相違ないんだ……おれは素的な飲み助だからな……さうよ，素的な飲み助よ，おれが本式に飲み出したら，すっ裸になるまで，何でもかでも飲んでしまふ……そして，

それから怠け出すんだ」。

ですが，ここらで止めて置きませう。さよなら

久功

二十五日

昨日から降り出した雨は止んで居る。が，空は重たく，凩のような風が荒々しく吹いた。もう花の終った菊や鶏頭の凋んだのや，サルヴヤの赤い花をむしり取って捨てたら，それこそ小さな庭ががらんとして，冬らしい情ない薄陽が冷たくさしかけた。

二十六日

天気がどんよりとして，風もないのにひし〳〵と寒い。背中がぞん〳〵寒く，頭がわれるように痛く，腰から手足の骨がぎごちなくみし〳〵する。自分は風邪を引いたのだ。夜は薬を飲んで早く床に就く。昨日から今日へかけて，ロマン・ローランの信仰の悲劇三部を読む。自分はロマン・ローランは「狼」だけしか読んで居ないのだが，何だか浸りきって好きになれない。第一部「聖王ルイ」と第二部の「アエルト」とは純ではあるが，外見程に衷に力がないように思はれる。幾分若いようでもあり，幾分無理な執擁〔拗〕さといふようなものを感じられる。斯うした根本的な一面をつきつめようとすることは，随分と六ヶ敷いことに違ひない。それは，彼が唯一のたよりとした理性のみでは，恐らくは成しとげられないのではないかしら。それはもっと全人格的な完成者にのみ出来るのではないかと思はれる。何故なら，徹底的であることが，常に深さと関連するとは思はれないから。そんな訳で，あまりに簡単な徹底には，何やら力の空虚が見える。其上これらの戯曲が上演される時は――それは全く正しく，全く善いものであるにせよ――人々をあまりに労れさせるだらう。第三部「理性の勝利」では，描写も内容もずっと腹雑〔複〕になって居り，スケイルも亦大きくなって居る。随分ガムシャラにかぢりついて居るようでもあるが，力も亦存分に内面的になって来て居る。只第三幕の暗示に就いては，何やら混沌としたものがある。第二幕の終りで立派に此の戯曲はまとまって居り，其の上立派な暗示をさへ持って居る。第三幕は，云はばエピローグなのではあるが，其れにしても無理があるか，或は全く蛇足でさへあるかも知れない。だが又ローランは，一つの確実なものをつかまへた。それは，社会の弱点だ。人間の弱点は既にあまりに追求され，弄ばれた。社会の弱点も亦相当には発かれた。だが又ローランの社会は，例へばイブセン〔ママ〕の社会のように，現在の社会乃至偶然の社会でない。彼はもっと必然の社会，社会其物の弱点を利用して，徹底的な理性に配して超えることの出来ない悲劇を作った。彼は自分の性には合はない。けれども又彼は偉□〔大カ〕である。

二十七日

昨晩，薬を飲んで汗をかいて寝たので，今朝は案外さっぱりして居る。日向ぼっこをしながら，小さな版画をほってみたりする。

二十八日

暗い空から，午後になって冷雨が降って，酷しく寒い。更に風が吹いて冷たい。

夜，築地に行く。ピランデルロの「各人各説」（みんな尤だ）[54]——道具に使はれて居るのは，同じ作者の「作者を探す六人の登場人物」と同じく，俳優と観客との不一不二である。ここでは主観（主観的事実）は，たわいのない変幻として退けられる。ここでは，純客観的実在は全き不可知の中に葬られる。

しかも尚，此の喜劇が存在する。虚無の上に踊る花であり，匂ひであり，声である。□□（空の）現実——即——多面的なる「空の現はれ」である。

そうならば，作者は此の中に，あまりに殊更に虚無主義的なるものを盛り過ぎはしなかったか。何故なら，これを徹底させるならば，彼は全く世を□□□遁れて，空気の如き存在となるか，さなくば生の否定，死を選ぶべきである。

にも拘らず，ここに立派に此の彼の喜劇がある。それならば，作者はもっと完全に道化になりすますがいい。さも——らしく。

雨が降って寒くて観客が少な過ぎた為に，大胆な演出が応へを得られないで，だいなしになったのは惜しい。観客が遠慮勝な観客に止まって，露骨な群衆になりきって居なかった為である。昨日はかなりうまくいったらしい。観客が群衆となって沸騰し，警官が驚いて飛出し，作者がねらった喜劇が立派に出来上ったらしい。

千田是也がうまいので驚いた。

ピランデルロの表現の確かさには驚く。例へばモレルロとドオロ，サヴィオの退場とロッカの説明，ロッカとサヴィオ，実に適切だ。少しの無駄がなくて，存分にはっきりして居る。ディエゴ・チンチの「客観」も亦少しの隙もなく完全である。

作者はディエゴ・チンチをして，我と我れを笑ひ，従って他をも笑って，執拗に純客観的なるものへかかづらはせたように，意地悪く不可知なる純客観をさらけ出し，我と見つめる。即ち作者にとってこれが喜劇たる所以は，ディエゴ・チンチと共に「俺は笑ふよ。俺の笑ひ方で笑ふよ」である。

それならば，観客がこの中に真理，真実，乃至主観的概念を探らうとすれば，彼は「人を馬鹿にしやがる」とか，「まるで意味が無い」とか，怒ったりむか〳〵と腹を立てなければならない。で観客は，芝居の始めから終りまで，群衆として，あり来たりの主観でどなったり説明したり，讃成したり，反対したり，喜んだり，怒ったり——つまり作者のツボに進んで飛びこむがいい。そして，芝居がすんだら，作者と共に，チンチと共に，彼の笑ひ方で笑ふがいい。

そこには，作者と俳優があり，作者と群衆があるので，登場人物と観客との間には，界線が引かれて居ない。だから，観客は芝居の進行中は登場人物に連らねばならない。そして，さて，ピランデルロになれる人にのみ，これは全く喜劇であり，他の人々はつまりは登場人物と共に怒ったり，間違へたり，くっついたり，離れたり――まあ，そういふ現実の人間なのである。

だが又ピランデルロ曰く「ヘッヘッ，それがそうだかどうだか――」

――――――――――――――――――――――――

午後，上原の勝〔勝雄〕ちゃんが，宮田からの言伝をもって来てくれる。原瀬が脳膜炎で大分悪いらしいと。

二十九日　日曜日

午後，原瀬の所を見舞ったが，奥サンは留守だったし，原瀬は全く意識がなかったので，直ぐ辞して築地に行く。マチネーを途中まで見て帰って来る。

〔3頁白紙〕

〔裏表紙裏面〕
［東京府下杉並町高円寺六一九　　土方久功］